国家のために奉仕する:
私達の村の軌跡

国立ゴロンタロ州大学
愛媛大学との共同

Fenty U. Puluhulawa
Lukman AR Laliyo
Lilan Dama
Raflin Hinelo

IP.034.05.2019

国家のために奉仕する：私達の村の軌跡

国立ゴロンタロ州大学
愛媛大学との共同

Fenty U. Puluhulawa
Lukman AR Laliyo
Lilan Dama
Raflin Hinelo

Ideas Publishing による
2019 年 5 月に初公開

住所: Jalan Prof.Dr.Ir. Joesoef Dalie No. 110 cities Gorontalo
メール: infoideaspublishing@gmail.com
IKAPI Member, No. 0001 / ikapi / gtlo / II / 14

ISBN: 978-623-234-000-8

編集者　: Lanto Ningrayati Amali
Mira Mirnawati
レイアウト　: Thahirun Katili
Maya Novrita Dama
Nariman Badjarad
カバー　: Vishnu Wijanarko

版権所有
本書の一部または全部を弊社の文書による承諾なしに 、 引用または複製することを禁止します。

目次

国立ゴロンタロ州大学 LPPM 研究所長からの歓迎の言葉 1
UNG LPPM 研究所のエンパワーメント開発研究センター長からの紹介 2
序文 3
序詞 4

第 1 部 KKN 共同プログラム 2018 年 6
KKN の構想 6
UNG における KKN の歴史 7
KNN 国際共同プログラムの仕様 7
KKN 国際共同プログラムの特徴 7
KKN の原則 7
学生の貢献 8
KKN 国際共同プログラムの説明 9
KKN 国際共同プログラムの目的 9
KKN 国際プログラムの目的 9
KKN 国際プログラムの中心プログラム 10
KKN 国際プログラムの実装フレームワーク 10
KKN UNG-愛媛大学共同プログラムのスケジュール 11
KKN UNG-愛媛大学の場所 12

第 2 部卒業生からのストーリーI
KKN 共同 プログラム 2013 年 13
ある早朝、Ishak Isa(イシャク・イサ)教授から電話がありました 13
日本人学生との出会い 14
日本の学生の事を知るようになる 14
日本の学生との研究 15
研究結果：リンボト湖の複雑な問題 16
愛媛大学グループが日本に帰国する 17

第 3 部 KKN COLLABORATIVE 19
2018 年度クラスの始まり 19

第 4 部 西ペンタディオにおける私達のストーリー
国際化されるペンタディオリゾートに向かって 21
西ペンタディオグループを結成する 21

オタナハ周辺の散策 22
アキラはバナナを買いたい 23
西ペンタディオでの初日 24
村落第 1 及び第 2 での観察 25
村落第 3 での観察 27
村落第 3 の地域住民へのインタビュー 28
漁師、商人、農民とのインタビュー 29
UNG の記念日の休日とペンタディオリゾートでの楽しい時間 29
西ペンタディオのコミュニティとの出会い 30
小学生と一緒に清掃する 32
県の事務所で行う発表準備 32
ゴロンタロ県の事務所での発表 33
ヴァイキーの家での夕食 34
さよなら愛媛チーム 35

第 5 部 ロンボンゴ村における私達のストーリー
観光産業のポテンシャルがある村 36
ナニ・ワルタボネにて朝の運動 38
伝統的な市場へ散歩 40
KKN Collaborative の開会式 41
ロンボンゴ村での住民へのインタビュー 45
ロンボンゴ村の商人へのインタビュー 48
計画作成とプログラムのアレンジ 49
ロンボンゴ村で開催したステークホルダーとコミュニティとの会議 50
UNG の dies natalies イベントに参加 52
発表資料の収集ならびに発表の準備 54
ロンボンゴ観光地の掃除 55
ロンボンゴの観光地を再び清掃 56
ロンボンゴ村と別れ 57
ボネ・ボランゴの県庁事務所にて発表 58
オレレでの休暇 60

第 6 部 フタダア村における私達のストーリー: ルピアになったゴミの銀行 61
フタダア村のコミュニティと初めて出会う 65
榊原先生とフタダアのコミュニティとの議論を聞く 69

フタダア村のティーンエイジャーとの議論 72
ゴミ袋の無料配布 75
コミュニティからビニールの袋を回収する 76
フタダアコミュニティの前でプログラムの発表を行う 77
フタダア村の病気のデータの収集 80
上手くまとまらないグループでの議論 80
私達のアイデアが承認された日 82
UNG の記念日とロンボンゴの散策 82
プログラム発表の日 84
共同の最後の日 86

第 7 部 イロティデア村において漁師とのストーリー 88
オタナハ要塞とリルヲ市場への旅行 88
KKN プログラムの 1 日目：イロチデア村にて 89
KKN プログラムの 2 日目：リンボト湖への訪問 93
KKN プログラムの 3 日目：村落第 1 でのインタビュー 94
アズキアゲストハウスに戻る 96
KKN プログラムの 4 日目：村落第 3 でのインタビュー 96
ティランゴ第 1 中学校への訪問 98
漁師との 2 回目のインタビュー 98
アズキアゲストハウスに戻る 98
KKN プログラムの 5 日目：政府へのインタビュー 99
UNG の dies natalies イベントに参加、ペンタディオリゾートへの訪問 99
KKN プログラムの 6 日目：グループディスカッションフォーラムの準備 100
KKN プログラムの 7 日目：グループディスカッションフォーラムの実施 102
KKN プログラムの 8 日目：発表資料の作成 103
KKN プログラムの 9 日目：発表資料の完成 104
KKN プログラムの１０日目：発表会の実施 105
日本の学生との別れ 107

図 1. 1 2018 年度の国立ゴロンタロ州大学で KKN プログラムを実施した位置 20
図 2.1 UNG の指導員 Pak Jaha(パク・ジャハジャ)先生と Fitriyane Lihawa(フィトリアネ・リハワ)さん 26
図 2.2 日本からの水質測定道具 26
図 2.3 41 個分のデータ収集ポイント 27
図 4.1 西ペンタディオグループ 38
図 4.2 榊原先生からの指示を受けている参加者たち 43
図 4.3 学長の建物内で撮った集合写真 44
図 4.4 住民が所有する空き地に散らばるゴミ 46
図 4.5 非衛生的な住民の家の排水 48
図 4.6 村の事務局で行なった発表と村人との議論 57
図 4.7 小学生と一緒にペンタディリゾートで実施した清掃活動 60
図 4.8 ヴァイキーの家で夕食後に撮影した集合写真 66
図 5.1 インドネシア、UNG の学生達と愛媛大学の学生達の初対面 69
図 5.2 アリーナに朝散歩後、「Dulohupa（デュロフパ)」の前で記念写真 73
図 5.3 愛媛大学の学生がとても美しいと言ったオタナハ要塞 75
図 5.4 ゴロンタロの伝統的な服を着ていたモデルさんと写真撮影 77
図 5.5 市場で熱心にインタビューする山下蓮 78
図 5.6 大学のリーダー達による UNG 学長ビルでの KKN Collaborative の開会式 80
図 5.7 日本の学生と中央スワワ地区での写真撮影 82
図 5.8 中央スワワ地区部長の部屋で行ったとの議論の様子 83
図 5.9 ロンボンゴグループのディスカッションの様子 86
図 5.10 周辺のコミュニティへのインタビュー89
図 5.11 周辺のコミュニティへのインタビュー90
図 5.12 汗だくになりながら村民の家を訪問する様子 91
図 5.13 市場でのインタビューしている様子 93
図 5.15 ステークホルダーとロンボンゴ村コミュニティの合同会議 97
図 5.16 日本とゴロンタロの伝統的な衣装を着て UNG の dies natalies （記念）イベントに参加したときの様子 102
図 5.17 Hutada'a(フタダア)グループとロンボンゴでの楽しい時間 103
図 5.18 ロンボンゴの観察と休暇で交流を深めるフタダアグループメンバーたち 104
図 5.19 グループが作成したプロジェットを説明するために環境サービス機関を訪問 107
図 5.20 ロンボンゴ観光エリアの清掃 109
図 5.21 ロンボゴ地域でゴミを拾う 110
図 5.22 ボネ・ボランゴ県の地域社会共同サービス活動に関する最終発表 115

図 5.23 プログラム終了後のひとこま（すっかり打ち解けたグループメンバーたち）119
図 6.1 日本とインドネシアの学生の初対面 121
図 6.2 ヒジャブを着用している日本の学生 123
図 6.3 ジンベイザメポイントに行くボートに乗っている日本とインドネシアの学生 126
図 6.4 オタナハ要塞の自然パノラマを背景に集合写真を撮った日本とインドネシアの学生 127
図 6.5 オタナハ要塞で集合写真を撮った日本とインドネシアの学生 128
図 6.6 地域社会共同サービス活動の参加者全員の集合写真 131
図 6.7 テラガ・ジャヤ地区事務所を訪問するフタダアグループ 132
図 6.8 フタダア村長との面談 133
図 6.9 フタダア村の周辺を探索している様子 134
図 6.10 フタダア村の図書館の外観 135
図 6.11 村のコミュニティをインタビューしているフタダアグループ 137
図 6.12 村の保健所を訪問しているフタダアグループと榊原先生 140
図 6.13 モスクへの行く途中で出会った住民にインタビューしているフタダアグループ 141
図 6.14 モスクに集合しているフタダア村・村落第 2 の住民 142
図 6.15 フォーラムで自分の意見を話している女性 143
図 6.16 榊原先生の説明を注意深く聞いている村の人々144
図 6.17 フタダア村の若者との議論 147
図 6.18 フタダア村の若者との議論 148
図 6.19 フタダダアグループ、李先生と村の若者との集合写真 149
図 6.20 フタダアグループよりインタビューされた住民 150
図 6.21 ゴミ管理会社に訪問したフタダアグループ 151
図 6.22 コミュニティにビニール袋を配布している様子 152
図 6.23 木から直接取った新鮮なココナッツをくれた警官とフタダアグループ 154
図 6.25 ゴミの重量を計算しているフタダアグループ 155
図 6.26 発表する部屋を準備しているフタダアグループ 157
図 6.27 フタダアの住民に発表しているフタダアグループ 158
図 6.28 フタダアグループが村の住民に提供したコンセプト 159
図 6.29 フタダア村のコミュニティとの集合写真 160
図 6.30 フタダア保健所で患者の状態について説明している保健所の医師 161
図 6.31 解決策の決定に向けてディスカッションを行うフタダアグループ 163
図 6.32 日本の伝統的な衣装（浴衣）を着て UNG の記念日に参加する学生 166
図 6.33 ロンボンゴ温泉で楽しい時間を過ごしているフタダアとロンボンゴグループ 167
図 6.34 ステークホルダーとゴロンタロ州政府に成果発表しているフタダアグループ 171
図 6.36 発表終了後の日本とインドネシアの学生 171

図 6.37 KKN Collaborative2018 年の参加者全員の集合写真 173
図 6.38 日本の学生が帰国する直前の写真撮影 173
図 7.1 インドネシア、UNG と愛媛大学の学生達の初対面 175
図 7.2 ティランゴ地区事務所への訪問 179
図 7.3 マスタード菜園への訪問 180
図 7.4 チロテ村の水地 181
図 7.5 乳棒と乳鉢を作る小規模内職 182
図 7.6 イロティデア村で見られたタガフ（網）の作成プロセス 184
図 7.7 管理されていないリンボト湖地域の状態 186
図 7.8 タマネギ栽培場への訪問 188
図 7.9 チランゴ第 1 高校の学生達とのインタビュー190
図 7.10 元村長官のアブドラ・ツナ氏とのインタビュー192
図 7.11 イロティディア村住民へのインタビュー194
図 7.12 日本の伝統的な衣装「浴衣」を着て第 55 回 UNG の dies natalies へ参加 199
図 7.13 ペンタディオリゾートにてグループで休暇 200
図 7.14 グループディスカッションフォーラムの実施 206
図 7.15 学生がイロチディア村に記念品を贈呈する様子 209
図 7.16 各グループの発表完了後の様子 213
図 7.17 愛媛大学の学生達との写真撮影 215

表 1.1 KKN Collaborative の活動実施スケジュール 17-19
表 2.1 水質調査結果 29

国立ゴロンタロ州大学 LPPM 研究所長からの歓迎の言葉

国立ゴロンタロ州大学（UNG）の最大の目標の一つは東南アジアの地域の潜在能力に基づいた文化的開発とイノベーションを活性化するリーディング・ユニバーシティを実現することであり、その目標を 2035 年までに到達することを目指しています。この目標を達成するため様々な方法のうち、国内および海外の高等教育機関との連携を進めており、UNG と外国の大学との共同はすでに始まっています。その一つとして挙げられるのは、愛媛大学社会共創学部との共同です。この共同より、UNG の理学部において地質工学科という新しい学科を創立することができました。

UNG と外国の大学共同はここで終わりではありません。これまでの共同は、UNG をリーディング・ユニバーシティとして実現するための取り組みであり、引き続き新しいイノベーションを生み出していくことが奨励されています。それは、UNG を国際レベルで発展させるための基礎を作るためのステップであります。大学間共同のフォローアッププログラムの一つは、Collaboration in Real Work(実作業の共同；KKN Collaborative）です。国立ゴロンタロ州大学の LPPM センター長として、「国家のために奉仕する：私達の村の軌跡」という本が出版されたことを非常にうれしく感じており、感謝の気持ちでいっぱいです。この本は、KKN Collaborative プログラムに参加した UNG のインドネシアの学生達と愛媛大学の日本人学生達の実践報告書です。この本が国立ゴロンタロ州大学のすべての学生と教職員に刺激を与えることを願っています。さらに、この作品中で異なる２つの国の学生が地域の問題を見つけ、解決策を考え、お互いの文化を理解するために協力をするという経験は、すべての読者と学生自身にとって貴重な体験となるでしょう。

最後に、編集者にお礼の言葉を送り、すべての協力者に感謝の意を表します。これらの善行が最大の成果をもたらすことを願っています。

UNG LPPM 機構長、

Prof. Dr. Fenty U. Puluhulawa, SH, M.Hum.

UNG LPPM 研究所のエンパワーメント開発研究センター長からの紹介

インドネシア、特にゴロンタロの地域の人々に有益な科学の発展を促進するために、エンパワーメント開発研究センターは地域社会サービスとその共同研究に関するいくつかのプログラムを立ち上げています。そのうち、Collaboration in Real Work（KKN Collaborative）は、2015 年から 2019 年の UNG の LPPM 機構のミッションの一つで、社会のエンパワーメントと福祉の地域的ポテンシャルを開発し、地域イノベーションを実現するという理念を掲げています。このミッションは、愛媛大学との共同によって実現されました。

UNG は愛媛大学の共同を継続してきました。最初の共同は、UNG の地質工学科という新しい学科の設立から始まりました。そして、2 つ目の共同は、ゴロンタロ地域で発生した社会的に複雑な問題の解決策を探し、その解決策を提案するというアイデアから始まりました。そして、Collaborative Community Service（地域社会共同サービス）が問題全体を解決することが期待できるという結論を得ました。

この KKN Collaborative プログラムは、2018 年には、23 人の参加者が参加した共同コミュニティサービスプログラムです。愛媛大学から 11 人の日本人学生と UNG から 12 人の学生が参加しました。彼らは、ゴロンタロの 4 つの村、ロンボンゴ村、西ペンタディオ村、フタダア村、イロティデア村で活動を実施しました。このプログラムは、2013 年から 5 年連続で実施されており、すべてのプログラムにおいて素晴らしい実績をあげています。そして、KKN Collaborative の学生は、最高の結果と大成功を収めました。

この KKN Collaborative のすべての参加者の実践報告書は、このプログラムの興味深い成果の一つになりました。この本には、彼らが遭遇した多くの刺激的な経験が物語の形でまとめたれた文章の中に含まれています。それらの 1 つは、非常に異なる 2 つの国の文化の融合のプロセスによるものですが、良好なコミュニケーションがあれば、これらの違いを乗り越えることができ、非常に有用なものをたくさん生み出すことさえできます。それによって、彼らは各問題を見つけることで一緒に学び、KKN の共同活動の場所である村の持続可能な発展のための解決策を見つけることができるのです。したがって、この本はすべての学生や他の一般読者にとって重要なものになるでしょう。そして、この本が、他の学生の成長への動機付けと興味を与える手段となり、学習を継続させ、自己能力を発達させることができると考えます。

ゴロンタロ、2018 年 11 月

Raflin Hinelo, S.Pd., M.Sc.

序文

この本は、全能のアッラー・ターラの許可なくして完成することはできません。それで、この本のドラフトチームからの冒頭の言葉として、”Alhamdulillah”を用います。「国家のために奉仕する：私達の村の軌跡」を読者に提示することができた事が、アッラーによる唯一の賞賛に値します。

この本は、UNG が主催し、愛媛大学と協力して、2018 年に行われた 12 日間の共同社会サービス活動の実践報告全体を要約した結果であります。内容はゴロンタロでの KKN Collaborative プログラムにインドネシアと日本の二つの国からの学生達が参加する中で彼らが経験した様々な出来事をまとめたもので、読者にとってとても魅力的な内容になっております。また、この本は各村の異なる物語で構成され、日本人学生とインドネシア学生各村の異なる物語を示し、村で問題が見つかった日本人とインドネシアの学生の旅についての興味深い物語がたくさんあるので、大変ユニークです。

しかし、この本は完璧ではありません。不完全さは私たちの無知によるものです。したがって、私たちは、この本を将来完成させる批判と提案を必要としています。この本を最初から最後まで書いてくださったすべての人々に深く感謝以外に言うことはありません。全能のアッラー、私たちすべての努力を常に祝福しますように。アーメン 。

ゴロンタロ、2018 年 11 月

著者/ドラフトチーム

序詞

2010 年に榊原正幸教授と（愛媛大学の代表）Nelson Pomalingo 教授（国立ゴロンタロ州大学学長）の出会いが、大学間の対話・協働の始まりで、この協働は今日まで維持されてきました。当時、UNG の新しい学部（地質工学科）の準備が行われていました。榊原正幸教授を導いた理由は、地質・鉱物科学の専門家であるからです。彼は北海道大学博士後期課程を修了し、愛媛大学で勤務しています。榊原正幸教授が代表を務める愛媛大学との共同研究のおかげで、地質工学科は現在 UNG で多数の学生を受け入れ、教育・研究に取り組んでいます。ただし、機関間のコラボレーションはここで止まる事はありません。こういった協力・協働の経験によって、両機関とも、インドネシアの人々、特にゴロンタロの地域にとって有益な科学の発展を実現するために多くのアクションを実践しています。また、UNG の現在の学長 Syamsu Qamar Badu 教授は、元学長が開始されたプログラムを継続しています。最後に、愛媛大学と国立ゴロンタロ州大学の間の地域社会共同サービスと共同研究について、より多くの取り組みがなされることが期待されています。

実際、地域社会サービスプログラムと共同研究のアイデアは榊原教授から生まれ、ゴロンタロで発生する社会問題の解決策を見つける方法に関係があります。ゴロンタロの各地域における地域社会のユニークな特徴は、厳密な分析と実践を必要としていて、問題を解決するには多様な科学が関与しなければならないと榊原教授が確信していました。彼の地質学の知識は、社会問題を解決するのに十分ではありません。榊原教授はこれまでにすでに 60 件の研究に達成し、2,617 人の読者のうち 500 人（researchgate.net）によって引用されましたが、それだけで問題を解決できる訳ではありません。したがって、この共同研究では、自然科学分野と社会科学分野との融合が望まれています。それは、地域社会で起こる問題の特性に応じた一つの科学だけでなく、他の科学との融合を必要とします。

UNG の LPPM 研究所は Dr. Fenty U.Puluhulawa 教授に導かれて、進行中および次のプログラムに関する榊原教授のアイデアを受け入れ、歓迎しました。最後に、2024 年にゴロンタロ・ゴールドプログラムによってゴロンタロの進歩と繁栄を実現するための協力が確立され、ゴロンタロにジオパーク準備委員会が設立されました。これは今後 5 年間で国際的なアイコンになります。

国立ゴロンタロ州大学と愛媛大学の共同は、以前から協力関係および LPPM 研究所の常識にとらわれない思考による科学への取り組みが榊原教授より理解され、決定されました。一般的に、多くの大学は科学的排他主義を示しており、共同研究を必要としません。例えば、地質学の研究者は社会問題に触れたくないので、他の科学との研究を行うために協力したくありません。彼らは地質学にのみ焦点を当てており、社会科学に触れたくありません。彼らによると、社会科学は、社会分野で資格のある者によってのみ開発されることができる。一見、それは普通であり、真実であると思われます。しかし、榊原教授は、社会問題は複雑な問題であると考えているため、それを解決するには、多様な分野の科学者が参加することが必要だと考えています。すべての知識は、それぞれの固有の分野の原則を有していますが、一

旦、他分野の研究者と協力することが受け入れられ、協力すると、その知識・成果は社会に利益をもたらす事ができます。科学の主な目的は、人間が地球上で幸福かつ平和に暮らせるように、人間の安全と福祉に利益をもたらすことではないでしょうか？

この協働の先駆的プログラムの一つは、KKN Collaboratives という形で行われるコミュニティサービスです。プログラムの参加者には、国立ゴロンタロ州大学と愛媛大学の学生が含まれていて、このプログラムは、2024 年のゴロンタロのグローバルジオパーク設立のための準備プログラムでもあります。

地域社会共同サービスプログラムの実装は、ゴロンタロ・グローバルジオパークへの準備段階です。ゴロンタロの人々が村人から市民レベルにかけて、まだ進歩していないマインドセットがある場合、グローバルジオパークは実現できません。社会の考え方を変えることはすぐにはできません。すべての村でより持続可能な発展を実現するには、正確な行動と正しい分析が必要になります。したがって、学生はトランス・ディシプリナリーアプローチを用いて、ステークホルダーと対話し、問題を探索することを学びます。村の社会で発生する問題とその原因を特定し、解決策を住民とともに探求することで、最終的には社会自体が問題を適切に解決できるようになります。

榊原教授と UNG は、若い世代の学生はまだ明確な考えを持っていないため、ゴロンタロの農漁村地域の社会問題を素直に取り組むことができると信じています。地域における学生の取り組みは、解決策を模索しながら、村で起こっている問題を発見しようとしています。この取り組みには地域住民も参加しているので、その中で村の人が最終的に自分自身で実践するためのトレーニングになると予想されます。このような背景から、この共同プログラムが作成されました 。

KKN Collaborative に参加した学生は、様々な分野の学問的背景を持っています。これらの学生が取り組む社会の問題探索は、コミュニティや社会からも支援されるでしょう。

このプログラムから以下のものが期待されています。

1) 問題を見つけて解決策を見つける過程は、コミュニティによって継続されることが期待される KKN Collaborative プログラムの参加者と地域住民によって行われ、最終的にはコミュニティ全体の文化になる。
2) コミュニティが地域の抱える問題を知り、それを解決することによって新しい自信が生まれる。
3) 家族に対する教育の重要性について認識が生まれる。
4) 家族を繁栄させる正しい方法を知る。
5) 一方で政府の援助に依存してない。

第 1 部

KKN 共同プログラム 2018 年

Raflin Hinelo（ラフリン・ヒネロ）

UNG のビジョンの一つに「ワールドクラス大学」を掲げています。それを達成するため、UNG は世界中のさまざまな大学と協力する必要があります。他大学との協力は、東南アジアの可能性のある地域イノベーションに基づいた文化開発場で競争力と卓越性をもたらすでしょう。競争力と卓越性を有するとは、教育、指導（学習）、研究、地域社会貢献のイノベーション開発において、一流大学であると判断されることを意味します。

国立ゴロンタロ州大学研究・コミュニティサービスセンター（LPPM-UNG）では、KKN を通じて教員と学生の両者が参加する地域社会サービスの共同プログラムを実施しています。このプログラムは、「海外共同実習（KKN-KLN）」と名付けられ、国立ゴロンタロ州大学と愛媛大学が協働で実施し、研究と地域社会への貢献が中心な位置づけになっています。この協働により、両機関の評価が向上するだけでなく、学生や教員、研究グループの社会貢献ならびに研究の質が向上することが期待されます。

KKN の構想

地域社会共同サービスプログラムは、学際的な教員の指導の元で、学生が献身的にプログラムを実施することに焦点を当てています。　学生は各専攻又は各学習プログラムの受講生ですが、このプログラムを指導する教員は学生と同専攻である必要はありません。つまり、学生の指導教員は同じ専門ではないことを意味します。それにも関わらず、このプログラムの活動は地域の現場で実施されるコースであり、４つの SKS を持つ学生に従わなければなりません。

UNG における KKN の歴史

国立ゴロンタロ州大学は、1966 年から現在まで約 51 年間かけて KKN 実施の豊かな経験を有しています。KKN には、少なくとも 6 学期（日本の大学制度では 3 年生）までに国立ゴロンタロ州大学の全ての学生が参加しなければなりません。　また、そのプログラムは少なくとも 1 ヶ月半（45 日間）行われます。

KNN 国際共同プログラムの仕様

2018 年に国立ゴロンタロ州大学と愛媛大学社会共創学部によって始まった地域社会共同サービスプログラムは、明確な目的があり、計画的に評価可能な目標を絞った方法で活動を実施されました。

KNN 国際共同プログラムの特徴

KKN は以下のような特徴あるプログラムを実施しています。

1. 両機関の正式な教育プログラムである

KKN 国際共同プログラムはインドネシアの国立ゴロンタロ州大学と日本の愛媛大学の二つの高等教育機関の協力に基づいて実施されたプログラムです。このプログラムは、両機関の正式な承認を得ています。この活動は、個人またはグループレベルではなく、両方の機関によって実施されています。

2. 学際的かつ現場主義で調査を行う

KKN 国際共同プログラムは地域コミュニティを中心に活動を行っています。参加学生は、地域社会が抱える複雑な問題を発見し、その解決策を見出すことを目指しています。そのため、本プログラムでは、学生は一つの分野に限定せず、学際的な科学を学ぶことを求められ、それによって、複雑かつ本質的な地域社会問題の発見と解決が期待されるのです。

3. プロフェッショナル意識

ここで言うプロフェッショナル意識とは、KKN 国際共同プログラムの実施においては、教員を含むいかなる当事者からの介入なしに、プログラム参加者自身がフィールドで見つけたデータの真実と正確さに責任を持たなければなりません。指導者の役割は、フィールドで参加学生のパフォーマンスを最小限に援助することです。学生は自ら、問題を特定し、解決策を見つけなければなりません。

KNN の原則

プログラムの参加者はプログラムの原則に従いながら、指示されている仕組みや計画的な方法で全ての活動を実行しなければなりません。

原則については、次のとおりです。

1. 共同

この KKN-KLN は、日本の愛媛大学の学生および教員と UNG の学生および教員の間で共同実施されます。 参加者同士が協力して問題を確認し、フィールド先（村）で解決策を発見します。

2. 教育とエンパワーメント

KKN-KLN は、問題の解決策を見つけるために地域コミュニティの可能性を見つけ、教育し、力づけることができなければなりません。

3. 科学的関連性

各参加者が社会の問題を見つけ、他の参加者と意見交換をしながら、科学に基づいた問題の解決策を提供する必要があります。

4. ニーズ

フィールド先（村）での問題の解決策は、社会の必要に応じて適切でなければならず、地域社会と政府によって実現される必要があります。

5. イノベーション

解決策によってもたらされた結果は、コミュニティの自然環境の保護をより重視する思考や視野を与える、真に革新的な結果でなければなりません。

6. 展望

この活動に関与する参加者は、社会が抱えている問題を見つけて解決するための広範な知識を持っている学生と指導者です。

7. 人格

この活動に関与する参加者は、人格者であり、他の社会の模範となるべきです。

8. 参加する意義

この活動に参加する参加者は、自らが志望して参加しているため、参加者は科学や技術を公衆への共有に貢献します。

学生の貢献

1. 触媒：学生は、村のコミュニティまたは村人のための開発のコネクタ（繋ぐ人）およびブースター（後押しする人）になります。

2. コンサルタント： 参加者としての学生だけでなく、村の発展を促進するための効果的な情報提供者になります。

3. 問題解決者：この活動の参加者である学生は、より多くの知識を持ち、社会で直面している社会問題を解決する能力を身につけます。

4. 動機付け：参加者としての学生は、村の開発を統合するために社会を動機付けることができます。

5. ファシリテーター： 参加者は、政府と国民の間の調和の取れた相乗効果を確立するために、地方政府によるコミュニティへの関心を促進しなければなりません。

KNN 国際共同プログラムの説明

社会サービスプログラムは、社会の文化的エンパワーメント（能力開花や権限付与）のトピックに関する実際の講義です。 この社会エンパワーメント活動は、公式および非公式の村に政府をパートナーとして関連させることにより、社会の実際の活動の中で積極的な役割を果たす UNG-愛媛大学の学生との協働によって行われます。 KKN 国際共同プログラムは、社会の独立性と繁栄を客観化する社会エンパワーメントにつながる活動を実施します。

KNN 国際共同プログラムの目的

1. 文化に基づく社会エンパワーメントプログラムを支援するために、コミュニティが直面する可能性と問題を特定します。

2. 社会エンパワーメントプログラムを支援する正規および非正規のプログラムに関するデータを収集します。この活動は現在まで実施されています。

3. 社会またはコミュニティが自立するように動機づけ、訓練するための支援を提供します。

4. 正規、および非正規の機関と関連することにより、機能的な技術を提供します。これは、 恵まれた家庭と繁栄した家庭の両方で、子供達の教育、青少年、および家族を強化するための支援を提供することです。

KNN 国際プログラムの目的

1. UNG-愛媛大学の学生と社会との知識交換を可能にします。

2. 実装された社会エンパワーメントプログラムを示すことができます。

3. 文化に基づいた社会エンパワーメントの開発における村落開発の相乗効果を生み出します。もしくは図ります。

4. 人々が自立するように動機を与えて、訓練の支援を実施します。

5. 社会エンパワーメントプログラムは機能的な技術を提供することができます。

KNN 国際プログラムの中心プログラム

1. 村の開発中に社会が直面する問題と可能性を特定します。

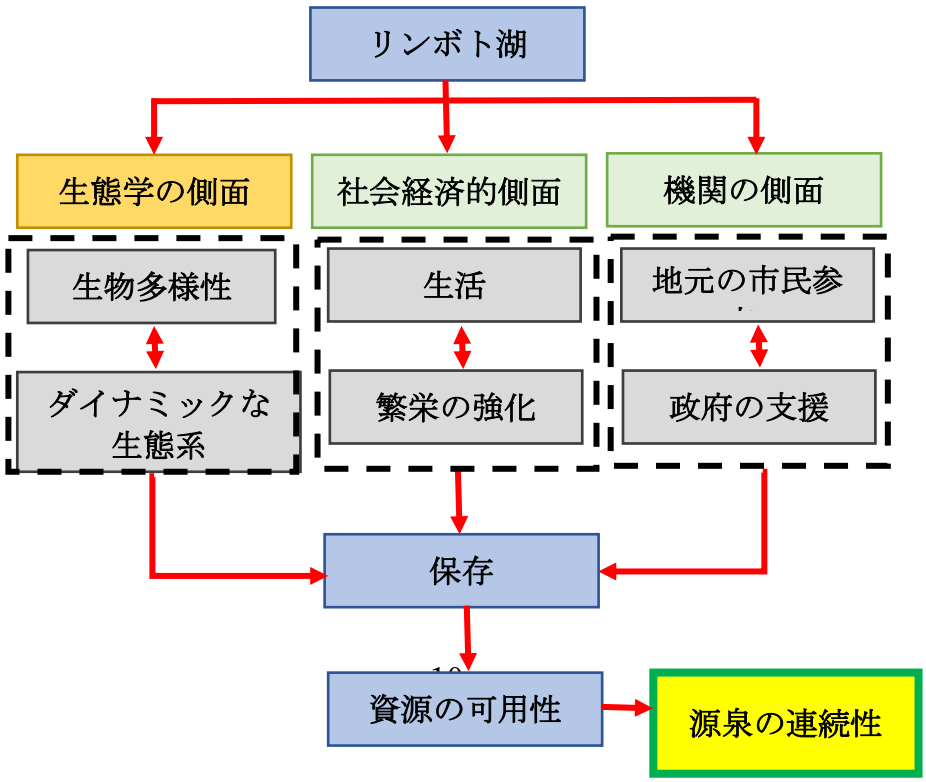
2. 文化面に基づいた社会エンパワーメントプログラムを援助する正規機関、および非正規プログラムに関するデータを収集します。

3. 正規、および非正規の機関と関連して、機能的な技術を提供することにより、社会エンパワーメント活動を実施します。

4. 地域自立プログラムの強化を支援します。

KNN 国際プログラムの実装フレームワーク

これらの KKN は次のように図式化できます。



KNN UNG-愛媛大学共同プログラムのスケジュール

表 1.1 KKN 共同プログラムの活動実地スケジュール

NO	活動	日付	実行者
1	各学部を経由して、KKN 共同プログラム参加対象者と連絡をとり、参加者を募集する	2017 年 12 月	LPPM UNG
2	希望する指導教員に計画を提出する	2018 年 1 月～2 月	指導教員
3	採択作業の運営	2018 年 3 月	LPPM
4	採択作業	2018 年 3 月 LPPM	運営
5	レビュアーより調査作業	2018 年 4 月	LPPM チーム UNG – 愛媛大学
6	計画の発表	2018 年 4 月	LPPM チーム UNG – 愛媛大学
7	対象の村への訪問(訪問が必要な場合)	2018 年 5 月	LPPM UNG
8	対象の村を決定する	2018 年 5 月	LPPM UNG
9	準備や 関係当事者（地方政府）との調整又は協力要請	2018 年 6 月	LPPM UNG
10	発表及び登録募集	2018 年 1 月～6 月	LPPM UNG - EHIME
11	地方政府及び州政府との調整	2018 年 3 月～7 月	UNG 、県及び州政府
12	学部との調整	2018 年 3 月～7 月	開催者委員会
13	各学部よりプログラムへの参加者名簿を送付	2018 年 4 月	UNG-EHIME
14	参加者の評価及び割り当て	2018 年 6 月～7 月	LPPM UNG
15	現地の位置を調査する	2018 年 4 月～7 月	UNG-県
16	現地での指導者を決定する	2018 年 5 月～6 月	LPPM UNG
17	一般的な指示	2018 年 6 月	学部との調整
18	日本からの参加者到着	2018 年 8 月 18 日	学部との調整
19	特別調達	2018 年 8 月 19 日	OC-UNG- 愛媛大学

20	報告及び指導者とともに現地実地の認識	2018 年 8 月 19 日	OC-UNG-愛媛大学
21	KKN の場所に行く	2018 年 8 月 20 日	学部との調整
22	現地での実施	2018 年 8 月 20 日～9 月 3 日	学生 参加者
23	LPPM UNG-EHIME チームよりモニタリング	2018 年 8 月 29 日～9 月 2 日	学部との調整及び UNG 公務員長- 愛媛大学
24	モニタリング及び評価管理者	2018 年 8 月 21 日～9 月 2 日	講師 及び 学部との調整
25	現地から学生の退出	2018 年 9 月 3 日	学部との調整
26	地方政府関係者と交流	2018 年 9 月 3 日 (夜)	学部との調整
27	閉会式	2018 年 9 月 3 日 (夜)	学部との調整
28	愛媛大学参加者が帰国する	2018 年 9 月 4 日	学部との調整
29	レポートの整理	2018 年 9 月	学部との調整
30	KKN 共同プログラムの学生参加者の評価を提出	2018 年 9 月	学部との調整 / LPPM UNG

KNN UNG-愛媛大学の場所

図 1.1 2018 年度の国立ゴロンタロ州大学で KKN プログラムを実施した位置

第２部

卒業生からのストーリーI
KKN 共同プログラム 2013 年

Ni Nyoman Widiantari（ニ・ニョマン・ウィデイアンタリ）

私の名前はニ・ニョマン・ウィデイアンタリです。ウィデイと呼ばれています。しかし、知り合ったばかりの友達は、バリ人の名前、ニョーマンと私を呼ぶことが多いです。私は国立ゴロンタロ州大学で化学教育科の学生として勉強しています。学生時代の忘れられない経験は、約 2 週間、日本人学生との KKN 共同プログラムに参加したことです。これから、地域社会共同サービス活動に参加した経験についてお話ししたいと思います。

ある朝、Ishak Isa(ｲｼｬｸ・ｲｻ)教授から電話がありました

ある早朝、Ishak Isa(イシャク・イサ)教授から電話がありました。

当時、私は故郷のメカルサリ村で暑い気候を楽しんでいました。ある日のこと、私は古い型の携帯電話であるソニーエリクソンタイプ C360 の番号を適当に押していました。すると、突然、イシャク・イサ教授から着信がありました。 彼から電話がかかってくることはまず無く、私はクエスチョンマークを数百万個ぐらい思い浮かべながら、すぐに電話に出ました。その当時は断食とイード・アル・フィトルの長い休暇中でした。

「もしもし、先生、こんにちは。」私は携帯を耳に近づけて言いました。

「もしもし、ウィディ、今どこにいるの？」 このようにイシャク先生が尋ねてきたので、私の好奇心はさらに強くなってきました。

「はい、先生。今、私は故郷、ルウクの西トイリです」。

「そう。いつゴロンタロに戻りますか？あのね、日本人学生と一緒に行う研究活動に参加してみませんか？」

「えっ、すみません？日本の学生と研究ですか？」驚き、大きな声で聞き返しました。

「先生日本の学生と話すときにどんな言葉を使うのでしょうか？日本語が話せない私が日本人学生と研究しなければならない場合はどうするのでしょうか」と、私は混乱し始めました。

「心配ありません。ウィディは英語が使えるから。」 イシャク先生は、私に解決策を与えてくれました。

「でも、先生、私は英語をすらすらと話せません」と言いました。私は自分の能力を信じられないと自分でも思いました。

「ウィディなら、できます、大丈夫。OK、参加しますよね？」

そうと決まれば、8 月 24 日にゴロンタロに行かなければなりません。なぜなら、8 月 25 日が日本から参加する学生との最初のミーティングになるからです。

「はい、先生。私この研究に参加します」。私は「はい」と言ったものの、これから何をするべきか混乱し始めました。どのように日本の学生と話すのか？彼らは非常に英語が出来るに決まっている。でも、私は？ああ... 心配するな。イシャク教授が私の能力を信じているのに、なぜ私が自分自身を信じないの？心配すると、もっと自信がなくなるからやめよう。

日本人学生との出会い

8 月 24 日に国立ゴロンタロ州大学の学生と日本の愛媛大学の学生との最初のミーティングがありました。しかし、その時、私はまだゴロンタロに向かっていました。私の同級生のユリもこの活動に参加し、彼女は最初のミーティングに参加しました。

ショートメッセージサービス（SMS）を通して、私はずっとユリに連絡し、日本人学生について、さまざまな事、彼らの様子、今後の取り組み、及びどんな研究がするのかを尋ねていました。これらの質問は心配と不信感からくるものでした。友人のユリは私にもっとリラックスするよう、すべてがうまくいくと私に説明してくれました。また、日本人の学生も英語を非常にペラペラと話しているわけでもなく、もし英語を話すことが困難な時には、グーグル翻訳を使えばいいと言ってくれました。さらに私達が研究を行う際には、女性または男性一人が、私達の翻訳者として協力してくれると聞きました。

2013 年に愛媛大学から学生 5 名が共同研究に参加し、講師の榊原正幸教授と助手の城前恭子さんが学生と同行していました。

日本の学生の事を知るようになる

私達の研究テーマは「リンボト湖の水質」で、愛媛大学の大川佳子さんと柳瀬伸子さんの 2 人の学生と国立ゴロンタロ州大学のニ・ニョマン・ウィデイアンタリ、ユランティ・アンチュラとアラン・ディジブランの 3 人の学生で構成されていました。研究は 2 つのグループによって行われ、別のグループはリンボト湖の魚の種と吸着剤カポックを使用した清浄水の処理が研究テーマです。

2013 年 8 月 25 日に私は日本からの研究員と会い、お互いを知ることができました。最初に対面したときには「こんにちは」、自己紹介、そして「はじめまして」しか会話しませんでした。私にとって、見知らぬ人と話すのは今回初めてでした。彼らが私の言った事を理解できなかったらどうしようと思い、とても緊張して心配していました。

その朝、榊原先生より私達が行う研究についてのプレゼンテーションが行われました。その後、グループディスカッションを行いました。最初にリンボト湖から始めて、リンボト湖の水質についての研究、方法、および最初の仮説の作成または背景の作成を実行しました。時間が経つにつれて、私達はお互いに近づき、お互いを知るようになりましたが、時々私達の異なる言語に制約され、その度に私はインドネシア語・日本語翻訳のためにグーグル翻訳を開きました。

日本の学生との研究

翌日、みんなにヘンドラ兄さんと呼ばれる、ヘンドラさんと一緒にリンボト湖の水質を中心としたこの研究を実施し始めました。時折、榊原先生、城前恭子さん、フィトリアネ・リハワさん、又はモハマド・ジャハさんも同行しました。

図 2.1 UNG の指導員 Pak Jahja(パク・ジャハジャ)先生と

Fitriyane Lihawa(フィトリアネ・リハワ)さん

私達は湖を回り、湖に直接繋がっている川を下りました。タポドゥ川、アロポフ川、ビヨンガ川、メロウポ川の四つの大きな川がありました。また、湖の真ん中を辿って、水の pH、塩分、温度、溶存酸素を測定しました。これら水質の定量的検査測定は、

下の写真に示しているように、愛媛大学の学生が日本から直接持ち込んだ道具を使用して実施しました。。

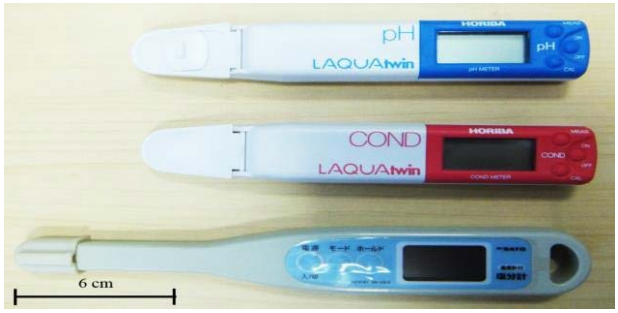


図 2.2 日本からの水質測定道具

この研究を完了するために、調査地でチームのメンバーと 6 日間過ごしました。調査中移動している時、私達は疲労を忘れるために身の上話をしばしば共有しました。しかし、私は車で移動する時、いつも吐きそうになっていました。チームメンバーの大川佳子さんは私が静かに黙っている姿を見ると、心配して「大丈夫ですか？」 と聞いてくれました。そして、私はいつも「はい、大丈夫です、ただ胃が痛いです」と返事すると「うーん...」と言って悲しい表情をしていました。

下記の図は、41 個のデータ収集ポイントを示しています。。

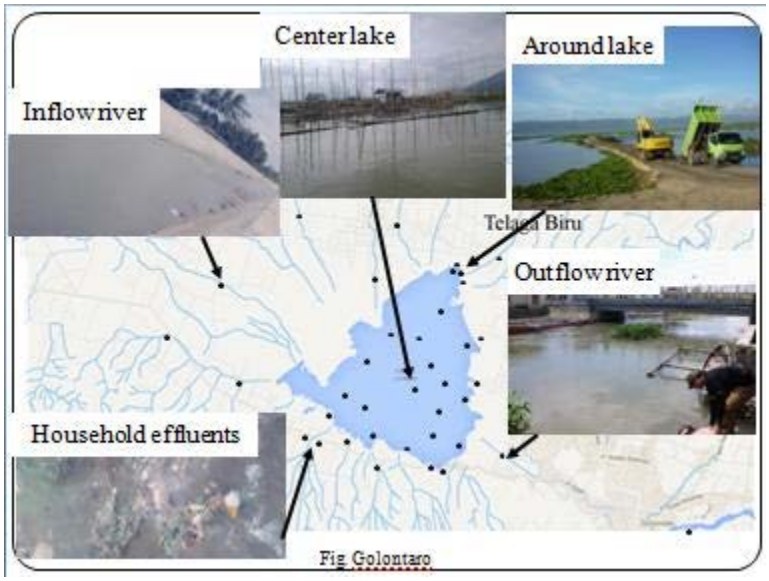


図 2.3　41 個分のデータ収集ポイント

研究結果：リンボト湖の複雑な問題

この研究より、リンボト湖で非常に複雑な問題の発生を発見しました。その問題とは、リンボト湖の深さ低下と面積の収縮状態です。1932 年に、リンボト湖の面積は約

7,000 ヘクタールで深さは 30 メートルでしたが、1999 年に面積は 1,900-3,000 ヘクタール減少して、深さは 2-4 メートル減少しました（リンボト湖の面積、年および深さ：Putra *et al.* 2012）。他の問題は、湖周辺で無秩序に育っているヒヤシンス、水質の低下、人口と水生生物相の減少、およびコミュニティによるリンボト湖地域で土地の占領の増加です。ゴロンタロ市、ゴロンタロリージェンシーのリンボト湖はおおよそ 2025 年までに消滅すると推測されています。

調査時、湖周辺で多くの重機が動いており、湖の堆積物とホテイアオイの除去を行っていました。ただし、これらを行うには多額の費用がかかると考えられます。一方、湖の周りに住む住民の家庭廃水によって、湖周辺の水の pH がアルカリ性になる可能性があります。また、湖に流れ込む濁った川の水も湖の水質低下の要因の一つであり、水質低下が湖の水生生物の死亡増加に繋がっています。調査の結果データを次の表に示しています（表 2.1）。

The location	pH	Salt concentrations (%)	EC (ms/cm)	Temperature (°C)
Around lake	7.66-8.52	0.01-0.02	0.24-0.55	26-30
Center lake	7.92-8.59	0.02	0.35-0.4	26-29
River to connect the lake	8.04-8.83	0.02	0.2-0.5	25-29.3
River not to connect the lake	8.18-8.26	0.01	0.2-0.22	22-26.7

表 2.1　水質調査の結果

フィールドでの研究を完了し、十分なデータを取得した後、Jahja（ヤヒャ）先生の部屋でディスカッションを行いました。 私達は、研究結果を理論的、科学的に検討しました。 研究の結果より、リンボト湖の水質は、きれいな標準の水と比較すると低下している事が明らかになりました。しかし、リンボト湖は多種類の魚がまだ生きることが可能な場所であることが分かりました。

次に、ゴロンタロリージェンシーのリージェント（評議員）、村長、国立ゴロンタロ州大学の学長、および講師の前で発表するために研究結果のレポートを作成しました。 ゴロンタロ市ムスダリファ会場で研究結果の発表が行われました。

愛媛大学グループが日本に帰国する

研究の結果を発表した後、私達はメンバーとの別れそして将来再会が難しいかも知れないと感じ、とても悲しくなりました。

愛媛大学の学生と同行者の講師は翌日帰国しました。

遠く離れていても、私達は大川佳子さんと柳瀬伸子さんと連絡を取り続けています。現在、大川佳子さんは修士号を取得しており、日本の有名な企業で働いています。柳瀬伸子さんは現在家庭を持ち、日本のレストランで働いています。

この研究は非常に貴重な経験を与えてくれました。私達は、研究を行う事により、多くの倫理観を得ました。この活動より、グループでの協力、規律、責任、相互理解を理解する事ができました。すべての目標において、それを達成するには努力が必要でした。

第 3 部

KKN Collaborative：2018 年度クラスの始まり

プログラムに参加していますが、同じ国から来た参加者とすでに友情を得ているという意味ではありません。全員、異なる専攻から来たので、最初は本当にお互いを知りませんでした。

それでも、このプログラムは国立ゴロンタロ州大学の学生にとって非常に面白いプログラムです。まず第一に、KKN Collaborative プログラムに参加するのはは簡単ではありません。私達はさまざまな要件、特に英語力やゴロンタロ文化に関する能力を身につけなければならず、非日常的な努力をしてきました。第二に、私たちはこのプログラムを通して楽しく新しい経験を得ることができます。第三に、このプログラムに共同参加している日本からの留学生と一緒に活動することは、それはそれは特別な事だからです

私達と違って、愛媛大学の学生達は採択システム無しで、このプログラムに参加できるので、UNG のインドネシアの学生から見ると簡単なことに見えました。恐らく、このプログラムには、インドネシア特に UNG の学生達がホストになっているため、プログラム参加者は多くの採択段階をクリアしなければならないようになっています。

以下は、私達のフルネームと学部専攻のリストです。

1. 山下 蓮、社会共創学部・産業マネジメント学科

2. 西原 あかり、社会共創学部・環境デザイン学科

3. 福永 晃、社会共創学部・環境デザイン学科

4. 町戸 志帆、社会共創学部・環境デザイン学科

5. 古谷 華穂、社会共創学部・地域資源マネジメント学科

6. 岩本 妃来羅、社会共創学部・地域資源マネジメント学科

7. 輪違 典子、社会共創学部・地域資源マネジメント学科

8. 佐藤 萌衣、 社会共創学部・環境デザイン学科

9. 檜垣 明里、社会共創学部・環境デザイン学科

10. 秋山 咲絵、 社会共創学部・環境デザイン学科

11. 田辺 凌、 社会共創学部・産業マネジメント学科

12. Arif Pranata Mustapa、スポーツ健康学部・看護部

13. Fengki S. Tomayahu 、教育学部・教師教育/小学校部

14. Firhan Kadulah、法学部・法律学科

15. Moh. Noorhidayat Baruadi 、理/数学部・ 地質工学科

16. Mohamad Reza Eka Prasetya、 工学部・土木工学科

17. Elvriza Vadyla Marchena Suto、文学文化学部・英語教育の科学

18. Frismarwati Wahyuni Lawadjo. 水産科学部・海洋学部水産学科

19. Giska C. Utami Dotu、経済学部・経理部

20. Mirnawati R. Ahaya、社会学部・コミュニケーション学科

21. Olivia Miranda Tiolemba、農学部科学技術食品学科

22. Siti Rahmatia Ntou、文学文化学部・英語教育の科学

23. Viky Noviani Hemu 、 スポーツ健康学部・看護部

私達がウィスマ・アズキヤで最初に会った時は午後 3 時半ごろでした。その前に、UNG 学生を代表する Fengky S. Tomayahu さんと Siti Rahmatia Ntou さんがゴロンタロジャラルディン空港で日本人学生をピックアップしました。二人とも日本人学生とは初対面だったので、まだ親しくなっていませんでした。握手とお互いの自己紹介だけしていました。日本の学生は親切でいつも笑顔が見られましたが、空港を出たバスに乗っていた時は静かでした。長旅のせいで、会話する気分ではなく、非常に疲れているようでした。

日本の学生達がゲストハウスに到着した時、UNG の学生は歓迎する準備ができていました。 すぐに知り合いになり、一緒に座りました。その後、4 つのグループに分かれました。榊原先生は、私達にこれから 12 日間実行するプログラムについて指示してくださいました。

プログラムの最初の日、活動が始まる前に、オタナハ城への旅行とボトゥバラニのジンベイザメツアーに行きました。私達は目的地で KKN 共同プログラムを実施する前にまず、愛媛大学の学生にゴロンタロの地域と文化を紹介するために地域を案内しました。

3 日目に、各グループはそれぞれのプログラムを実行しました。続いて、次の章では、各グループの刺激的な経験について説明します。

第 4 部

西ペンタディオにおける私たちのストーリー：国際化されるペンタディオリゾートに向かって

2018 年 8 月 25 日の午後 3 時半に、11 名の日本人チームがゴロンタロの土地に到着しました。そのとき、UNG の学生はすでにアズキヤゲストハウスにいました。日本のチームは外国語を話し、白い肌と変わった行動をしていたため、UNG の学生は奇妙に感じました。その後、日本のチーム代表の一人が UNG の学生に挨拶しました。彼らは自己紹介をしながら、お互いの名前を握手しながら伝えました。その後、日本人とインドネシア人を含むすべての学生は、自分たちが取り組む地域社会共同サービス活動についてプログラムの代表である榊原教授から指示を受けました。

基本的に、インドネシア・日本の地域社会共同サービス活動は両方の大学の学生 23 名で構成されていました。この 23 名の学生は West Pentadio(西ペンタディオ)グループ、Lombongo（ロンボンゴ）グループ、 Hutada'a（フタダ）グループと Ilotidea（イロティデア）グループに分けられました。まずは、西ペンタディオ村に活動する第 1 グループである西ペンタディオグループの活動について紹介します。

西ペンタディオグループを結成する

図 4.1　西ペンタディオグループ

榊原教授の指導を受けた翌日、ペンタディオグループは集合しました。この日は、ペンタディオグループ（日本の学生とインドネシアの学生）の初対面の日でした。このグループはインドネシア、UNG から Reza(レザ)さん、Frengki(フレンキー)さん、

Viky（ヴァイキー）さんと日本、愛媛大学から佐藤萌衣さん、古谷華穂さん、田辺凌さんで構成されていました。

日本の学生はペンタディオの地域の事はよく知りませんでした。それどころか、インドネシアの学生もペンタディオという名前を知っていましたが、この地域について詳しく知っているわけではありませんでした。ですから、最初に実施したのは、ペンタディオについて話し合う事でした。

日本人学生達にとって、インドネシアで行うこのプログラムを 12 日以内に完了する事そして地域社会共同サービス活動を問題なく進めることは簡単な事ではありません。したがって、日本の学生達をゴロンタロの環境に順応させるために、UNG の学生達は翌日、オタナハ要塞へ訪問する前に日本の学生たちを休ませることにしました。すべての学生をリラックスさせることに加えて、この一歩がゴロンタロの文化を紹介できることを願っていました。これにより、日本の学生達が新しい環境に順応しやすくなると期待していました。オタナハ要塞への訪問には私達のグループだけでなく、他のグループも参加する予定になりました。

ミーティングの終わりに、みんなのコミュニケーションがもっとよくなる事を目指して、LINE の ID を共有し、LINE アプリでグループを作成しました。プログラムを成功させるには、みんなと親しくなる事が重要だと考えたからです。

オタナハ周辺の散策

今日は 2018 年 8 月 26 日です。昨日決定した通り、私達はちょうど 14 時半にゲストハウスに集まりました。私達 UNG の学生は、どんな行事でも時間厳守である日本人学生を尊重するので、常に時間通りに行動するようにしていました。

午後 3 時に、Grab アプリで予約した公共交通機関を使用して出発しました。Grab を使用して、ゲストハウスからオタナハ要塞まで車をレンタルする費用は 45，000 ルピアで、インドネシアの UNG 学生（私達はそれぞれ 15，000 ルピアを出し合いました）が日本からのゲストへの感謝の形として車のレンタル代を支払いました。知り合ったばかりの人と一緒に歩くのは初めてでしたが、お互いにお喋りすることができました。コミュニケーションに使用した言語はインドネシア語でも日本語でもなく、英語でした。

幸いなことに、日本とインドネシアの両方の学生が英語を学んでいました。国際的な言語である英語のおかげで、スムーズにコミュニケーションすることができました。「日本語で話さなければならない時って想像できますか？」日本人学生にとって、インドネシア語を話すことが難しい一方で、インドネシア人学生にとっても日本語で話すことは難しいことでした。

オタナハ要塞への旅行は約 30 分かかりました。旅行中、最初は気まずく沈黙が多かったのですが、徐々に気楽に話せるようになりました。私達は大体同じ年齢なので、次第にさりげなく話すことができて、ちょっとした会話からだんだん仲良くなっていきました。会話中、私達（インドネシアの学生）は日本の学生達がインドネシアのゴロンタロに対して、非常に感銘を受けたことが分かりました。まず、最初に感銘を受けた点は道路を通過する時にゴロンタロの住民の群衆が家の前にバナーを準備しているのを見た時でした。バナーは毎年 8 月 17 日に設置されるため、私達にとってはその風景は一般的なものでした。インドネシアが現在、独立日を祝っている事を日本人学生に説明すると、彼らは驚きました。

私達は午後 3 時半にオタナハ要塞に到着しました。オタナハ要塞全体を探索するために散歩に行きました。日本人の学生達がシタデルのオタナハについて、好奇心を持っている事が分かっていたため、この砦に関する説明をしました。時々、日本の学生達は色々質問をし、私達は彼らの質問に答えました。

この要塞を探索した時に日本の学生達にとって、最も印象に残ったのは、遠くからリンボト湖を見える事でした。日本の学生達だけでなく、私達もオタナハ要塞から見える驚くほど見事に美しいリンボト湖の景色に感動しました。特に午後だったので、暑すぎず、オタナハ要塞をより快適に過ごす事ができました。

オタナハ要塞を散策した後、午後 5 時半頃にゲストハウスに戻る事にしました。

アキラはバナナを買いたい

私達は午後 5 時半に街に戻りました。しかし、ゲストハウスに向かう途中で、アキラさんが突然バナナを買いたいと言ったので、Liluwo(リルヲ)市場に立ち寄りました。

午後 6 時にリルヲ市場に到着し、果物屋の屋台に直行しました。市場を歩きながら、私達はおしゃべりをしました。日本でバナナの生産は非常にまれであるため、アキラがバナナを買いたいと言った訳に気づきました。有難いことに、ゴロンタロではバナナが豊富にあり、日本とは対照的にあまり食べないので、バナナが腐っていることがあります（これはバナナを日本に輸出するアイデアになりました。）最終的には、アキラがバナナを買っただけでなく、他の友人も彼に続いて果物を買うことになりました。

他の友人達はランサやドラゴンフルーツを買いました。果物を購入した後、インドネシアの学生達は伝統的な市場を散策するよう日本のチームを招待しました。市場を出た後、皆おなかがすいていたので、パンジャイタンのウォン・ソロレストランに向かいました。

図 4.2　榊原先生からの指示を受けている参加者たち

私達はウォン・ソロで食事をして、日本の人学生は本当に辛い食べ物が苦手なことを初めて知りました。でも、辛い食べ物が好きな人が一人いました。 彼女の名前は岩本妃来羅さんです。食事の後、私達は bentor（ベントル)でゲストハウスに帰りました。

西ペンタディオでの初日

朝起きるのには余分な労力が必要ですが、私達の愛する地域社会共同サービス活動のために、早起きする価値があります。朝の 7 時前に、シャワーを浴びてきちんと服を着ている皆さんから良い香りがしていました。特別な朝食を食べて、西ペンタディオへの冒険に出発する準備ができていました。

図 4.3　学長の建物内で撮った集合写真

午前 7 時に、全てのグループからの全ての参加者が集まりました。アズキヤゲストハウスは虹の壁で覆われた冷たい空気がありました。地域社会共同サービス活動に対して最高の態度を示すため、時間厳守を心がけ、私達は毎日午前 7 時に始まる活動を行う準備をしていました。私達は LPPM に集まって榊原先生より活動についての指導を受けました。

私達の最初の課題は、社会共同サービスプログラムの学生、講師、先生を含むすべてのメンバーが学長の建物で一緒に写真を撮る事から始まりました。その後、私達は最初の日の活動として、テラガビル地区事務所と西ペンタディオ村事務所を訪問するよう指示を受けました。訪問の目的は、私達が行う課題を報告して許可を取得することでした。テラガビル地区事務所を訪問した時、彼らは親切で、西ペンタディオ村に直行するように勧めてくれました。彼らは会議の準備中だったので忙しそうでした。

ウエストペンタディオ村に到着すると、私達はすぐに村長とスタッフに会いました。彼らは私達を意欲を持って歓迎し、村長の部屋に案内してくれました。その後、自己紹介と訪問目的の説明をしました。

地域社会共同サービス活動の参加者の内 1 名が既に西ペンタディオ村を訪れていたので、私達の到着は彼らにとってそれほど驚く事ではありませんでした。そのため、彼らは私達を歓迎してくださいました。村長に報告した後、その日の内の行動について議論しました。議論の結果、3 つの村を訪問することへの同意を得ました。ただし、その時に実施する内容は、西ペンタディオ村に存在する問題を特定するための、村落第 1 および第 2 での予備観察でした。（村落第 3 は翌日に観察しました）

村落第１及び第２での観察

午前中に村落第 1 で観察を行いました。村落第 1 で最初にする事は、村落第 1 の村長に会うことでした。彼は親切で心の優しい人でした。村落第 1 の村長は、村落の教育の質が非常に低いことを教えてくれました。これは、教育がわずかに優れている村落第 2 と異なる点でした。観察の結果から、村落第 1 の問題は教育に関連しているだけではなく、村落第 2 と共通する、いくつかの問題も存在する事が分りました。それらは新しく発生している問題ではなく、既存のものでした。村落第 1 及び第 2 での最初の観測に基づいて見つかった問題は次の通りです。

1. 低い学歴

2. ゴミ

図 4.4 住民が所有する空き地に散らばるゴミ

インドネシアの社会ではゴミ問題は関心度の高いニュースではないため、西ペンタディオ村の村落第 1 に住んでいる住民にとっても大きなニュースではありません。居住者の家の各正面には、燃やされているゴミの山がありました。また同様に、ゴミはすべての地面に目に見えるように散らばっていたので、オープンスペースでも見つかりました。 通常、空き地を見つけると、そこに山積みになっているゴミの散乱が常に続いていました。

確かに見た目が美しいものではないので、この現象に住民はうんざりしているように見えました。その上、この現象は地域社会の健康状態にも影響します。住民から取得した情報によると、この場所には廃棄物処理の場所がないとのことでした。

3.ゴミ臭による大気汚染

ゴミ問題とは別に、私達はいくつかの問題を発見しました。それらの 1 つは、ゴミによって発生する悪臭でした。悪臭は、村落第 1 の集落を歩き回る動物の糞に由来していました。その動物は牛、ヤギ、鶏などです。私達が通り過ぎた所に動物の糞が散らばっているのを容易に見つけることができたのも、そのためでした。その糞を踏まないように注意して歩くのはとても大変でした。

4. 排水

次に排水（下水処理システム）の状態が悪いことが分かりました。居住者の家の横には、家庭用の下水処理下水道が設置されており、排水路は広く開かれているため、ゴミが混ざって流れが妨げられている事が分かりました。廃棄物の流れ着く河口はリンボト湖でした。

図 4.5　非衛生的な住民の家の排水

5.不十分なペンタディオリゾート管理

私達の意見として、最も緊急の問題はペンタディオリゾートへの訪問者の数が少ない事でした。この状態は、地域社会に大きな影響を及ぼします。基本的に、西ペンタディオ村には、温泉リゾートというユニーク（固有の）な観光地があります。しかし、上記に示したように、このリゾートは周辺の住民に十分な経済的供給を提供していませんでした。その日の観察は午後 12 時に終了しました。村の事務所に戻って、すぐに昼食を食べました。疲労状態でお腹が空いていませんでしたが、美味しそうに盛り付けられた食事が私達の食欲を増進させました。昼食をとった後、私達は調査結果について議論し、以前見つけた問題データに基づいて問題を特定するために活動を続けました。議論は一般的な議論でした。壁に取り付けられていた時計は 15:00 を指していたので、作業を終えてベースキャンプに戻ることにしました。

村落第 3 での観察

2 日目に私達が実施した課題は村落第 3 を観察する事でした。村の事務所から地元の人々の住居までの距離が遠く、その土地が非常に広いため、みんな疲れました。しかし、私達が実施した興味深い観察により、疲れがとれました。村落第 1 のケースとは異なり、ここでは異なる特性のある問題が見つかりました。幸運な事に、農民に会い、村落第 3 で発生している農業問題に関する多くの情報を得ることができました。

村落第 3 で発生している問題は次の通りでした。

1. 灌漑の問題
2. 上水不足
3. ゴミ問題

農家の 1 人とのインタビューを終えた後、私達は村落第 3 エリアを観察し続けました。この日の観測活動も、午後 12 時に終了し、食事で脳をリフレッシュしました。昼食後、午後 3 時まで調査結果について議論しながら活動を続けました。その日、みんなはすぐにゲストハウスに戻らず、LPPM に寄って調査結果についての議論を継続し、それらを検討する方法を調べました。

村落第 3 の地域住民へのインタビュー

3 日目のフィールド活動は、1 日目と 2 日目の活動より多少異なっていました。フィールドへの出発時間は、最初の日と比べてかなり遅く、朝 8 時に出発しました。その日の活動は、周囲の住民にインタビューして、前日に得た問題のデータを確認し、追加が必要な問題のデータを加える事でした。インタビューを開始する前に、まず面談を行い、住民に尋ねるインタビューのポイントを確かめました。ミーティングが終わった後、私達はすぐに住民の家に急いで行って、住民にインタビューしました。情報を取得する時間を簡素化して管理できるように、3 つのグループに分かれました。このグループ分けは、インタビューする地区（村落）の数に応じて調整しました。最初の計画の通り、インタビューは正午まで行われ、昼食後も続けられました。

３つの村落から来てくれた 30 人にインタビューを実行することができました。前日のように、午後 3 時にインタビューを終えることができたので、LPPM に戻り、その日のインタビューの結果について議論しました。当時、私達は、発見した問題の特定、問題の境界線、問題の定式化、およびそれらの問題を解決するための解決策などを中心に検討しました。きちんと 11:30 には、問題の境界線を分析し、検討するという結論に達しました。私達が解決する問題は、ペンタディオリゾートの解析に決めました。考慮すべき点は、リゾートは市民にプラスの影響を与える事になっていますが、実際の状態は異なっている事でした。そのため、市民の期待に応じてリゾートを使用するには具体的な解決策が必要だと考えました。

私達の分析によると、ペンタディオリゾートが地元の人々の経済に大きな影響を与えなかったいくつかの原因がありました。まず、収入エリアと売り手の収入に影響を与えるペンタディオリゾートの訪問者の数が少ない事です。第二に、十分に管理されていないゴミ問題です。第三に、ペンタディオの施設の状態が悪いため、最初の訪問時にあまり魅力的ではない印象を訪問者が受けるので、二度とペンタディオリゾートを訪問したくないと思わせてしまうことが原因です。

上記の問題は、もちろん、地方政府が住民との関係を築き、リゾートとリゾートの緩衝地帯の管理に協力することが大きな課題になります。

前日と同様に、昼食を食べてエネルギーと心を回復するために休憩を取った後、榊原先生は私達と会い、以前に先生がインタビューされたペンタディオリゾートの経営についてよく知っている市民にインタビューする事を提案してくださいました。この住民とのインタビューは長時間に及びました。その後、彼は、建設されてから現在に至るまでの間、ペンタディオリゾートに存在するさまざまな問題を教えてくれました。

インタビューが終わった後、午後 3 時になったため、すぐに村の事務所に戻りました。LPPM に戻って、フィールドで得た最近の情報について議論する必要があります。

漁師、商人、農民とのインタビュー

前日のように、私達は朝からフィールドに出発しました。今日の活動は議論から始まり、事前にまとめた計画で進みました。村の事務所に到着した後、私達は後で行う漁師、商人、農民へのインタビューについて議論し、インタビュー内容を検討しました。このインタビューの背景は、この観光スポット、すなわちペンタディオリゾートが住民の収入を増加させるなど住民の利益をもたらすことができるかどうかを知ることです。通常通り、村ごとに 2 名ずつ分かれて実施しました。この短いインタビューから得た結果として、住民はペンタディオリゾートの経営より十分な経済的利益を得られないことが分かりました。また、ペンタディオリゾートのサプライヤーになることができる商人として関与できることを期待していることも分かりました。

インタビューは昼食を挟んで、午前 10 時から午後 3 時まで行われました。その後、前日と同様に LPPM /ゲストハウスで調査結果について再度議論しました。

UNG の記念日の休日とペンタディオリゾートでの楽しい時

計画された活動のスケジュールに従って、今日は休日でした。午前中は、地域社会共同サービス活動に関連する活動は行いませんでした。しかし、UNG のお祝いイベントに参加する必要がありました。イベントは午前中に始まり、正午までに終了しました。

午前中に行った私達の活動は、お祝いイベントの一環としてのグリーンウォークでした。また、日本の学生はダンスを 2 曲準備していました。ダンスはとても面白かったです。その後、日本の学生が UNG の学生と一緒に写真を撮るためにそれぞれ分かれた時、UNG の学生は自分達の順番を得るために競争しているように見えました。

社会共同サービスプログラムは午後 1 時に開催されました。休暇中にペンタディオリゾート周辺の訪問者にインタビューする時間がなかったことを踏まえて、この休暇中に現地に行きたいと思っていました。訪問者の違いもありますが（有意ではありませんが）、休日には明らかに街の外から来た訪問者もいます。この日は、空き時間がある「イロティディア」グループと榊原先生のグループがペンタディオグループと一緒に参加しました。現地では、ウェブサイトやリゾートのプロモーション用の写真を撮る前に、リゾートの訪問者と労働者とのインタビューを行いました。その後、サウナ、温泉、プールで体をリラックスさせました。午後 5 時にようやく活動を終了しました。今日は明らかに前日とは異なり、より長く活動して、さらにペンタディオリゾートの施設を楽しむ事ができました。

西ペンタディオのコミュニティとの出会い

午前 7 時半に、社会共同サービスプログラムの参加者全員がゲストハウスに集まり、それぞれのフィールドに行く準備をしていました。ちょうど 8 時に、西ペンタディオ、正確には西ペンタディオ村の事務所に向かいました。

午前 9 時半頃、午後の発表のために議論と資料の準備を始めました。私達は「廃棄物管理」の発表についてパワーポイントを作り、村での会議のための補助装置を準備し、LPPM に連絡してプロジェクターを借りました。その後、村の役人と話し合って、西ペンタディオ村のすべての村落の人々を今日の午後の会議に招待する事を忘れないように依頼しました。

昼食後、私達はまた「村の会議」と呼ばれる会議について議論をしました。この会議は、現在発生している問題に耳を傾け、希望を与え、村落第 1～第 3 の住民に解決策を提供する事を目的としていました。私達は耳を傾けるだけでなく、住民にフィールドでの調査結果も伝える予定でした。

住民を会議に招待するのは簡単な事ではありません。住民が全員出席するという保証はありません。それでも、市民は私達の招待に感謝してくれるだろうと楽観的に考えていました。しかし、私達は招待する側であるため、招待したゲストをおもてなしする必要がありました。そこで、ゲストのため、ケーキやミネラルウォーターなどスナックを買うための資金を集めました。地域社会共同サービス活動の各参加者から、1 人あたり 20,000 ルピアほどのお金を集めました。

私達が議論していた時に榊原先生が来られました。先生は私達の議論を聞いてくださったので、みんな喜んでいました。西ペンタディオの村の住民との会議がついに始まりました。会議の場所は、西ペンタディオ村のホールでした。会議の結果は次の通りでした。

1. 住民は、ペンタディオリゾートを修復し、インフラの追加でリゾート改善を望んでいます。

2. 住民は、ペンタディオリゾート周辺の環境をきれいにすることを約束しています。

3. 住民は、ペンタディオリゾート内の労働者を西ペンタディオコミュニティの労働者にしたいと考えています。

4. 住民は、地区政府よりゴミ収集車を提供してほしいと考えています。

5. 住民は、ペンタディオリゾートの管理を民間部門が管理する事を望んでいます。

「村の会議」は午後 6 時半まで行いました。その後、 私達はすぐにゲストハウスに帰りました。

図 4.6 村の事務局で行なった発表と村人との議論

朝の 7 時から 8 時まで、私達はゲストハウスに集まり、今日予定している活動について議論しました。私達の 1 つの大きなグループを 2 つに分けて、今日の活動を実行するために予定を立てました。最初のグループは、UNG インドネシアの学生 2 人と日本、愛媛の学生 2 人と合計 4 人で構成されています。このグループの課題は、ペンタディオ周囲のゴミを清掃する事です。この活動の目的は、私達が掃除しているのを住民が見た時に、どのような反応をするのか見るためでした。

別のグループは、データの処理を担当するヴァイキーさんと佐藤萌衣さんの 2 人の学生で構成されました。このグループは、市民へのインタビュー結果を統計形式でまとめました。

その後、清掃活動が始まりました。ペンタディオリゾートの入り口から清掃しました。 それから、目の前に見えるゴミを拾い始めました。次に、小さな屋台、アルコール飲料の売り手、リンボト湖のほとり、釣り場を通って清掃しました。この活動を実行したのは、ペンタディオエリアを清掃するという実際のアクションを開始したかったからです。そして、私達の行為を住民が見えるようにすることで、その行為を住民の日常生活に取り入れることができると考えました。

フィールドの旅行中、小学校を発見しました。私達は学校を訪問することを決め、幸運にも学校の校長に会うことができたので、彼にインタビューを行いました。小学生は毎日清潔なライフスタイルを身につけるように教えられており、毎週金曜日、小学校内のコミュニティ全体が協力して学校内外のすべての地域を掃除していると彼は言いました。

時間が経って、正午になりました。 私達は掃除を辞めて、いつものように、昼食のために休憩して祈りました。そしてまた、午後 1 時から活動を続けました。

先ほど行った小学校の校長との議論より、明日、ペンタディオリゾート地域をきれいにするために小学生と協働するという新しいアイデアが生まれました。もちろん、私達が行うすべての行動は、村長によって知られ、支援されなければなりませんでした。さらに、私達は村長の所に行って、私たちの活動に対する同意と支援を求めました。次に、村長は、小学校の校長に連絡してそのアイデアを承認するように命じました。

小学生と一緒に清掃する

図 4.7　小学生と一緒にペンタディリゾートで実施した清掃活動

朝 7 時に、いつものようにゲストハウスに集まり、今日の予定されている活動について議論しました。8 時に西ペンタディオ村の事務所に向かい、村長に会いました。

村長とは、今日実行する清掃活動について話し合いました。その後、私達は村長を連れて小学校に行き、村落第 2 の村長も一緒に参加しました。

小学校に到着した後、校長に清掃活動の許可を申請し、活動の目標を提案しました。そして、校長から活動実施許可を得て、小学生が 60 名、２名の教員が補助として環境をきれいにする活動に参加することになりました。

午前 10 時に、私達はペンタディオリゾートに向かいました。目的地に入る前に、最初にペンタディオリゾートに、小学生と一緒にリゾートを清掃する計画の許可を求めました。ペンタディオリゾート一時的な責任者であるナイム氏より、ペンタディオリゾートに無料で入場し、リゾートの内部エリアを清掃する許可を与えられました。また、小学生達がこの活動に非常に熱心だったので、私達も喜んでいました。活動修了後、小学生達に清潔が重要である事、掃除を後回しにせず、今から始めなければならないと教えました。清掃活動は正午に終了し、私達は休憩、祈り、食事をするために村の事務所に向かいました。

休憩の後の次の活動は、今日行った議題に関する情報共有と議論です。グループメンバーの 1 人がパワーポイントを作り、グループの一部はペンタディオの内側を掃除しました。午後 3 時にゲストハウスに戻り、今日の活動結果について説明を行いました。

県の事務所に行う発表についての準備

私達の今日の活動は今まで行って来た活動とは多少異なります。朝 8 時にゲストハウスに集合した後、2 階にある LPPM 国立ゴロンタロ州大学に向かいました。今日の

活動は LPPM UNG で開催され、発表資料の準備を重点的に行いました。朝 9 時に、取得および分析したデータを使用して、地域社会共同サービス活動の結果を表示するための資料の作成とまとめる作業を始めました。この発表資料は、分りやすいように、基本原則を用いてシンプルに作成しました。榊原先生はまだできていない私達グループの発表の資料に対してアドバイスをしてくださったので、作業中の発表を作り直しました。各メンバーからの異なる意見を強制的に付け加えることは困難です。最後に、私達はそれについて再考する力がなく、20 分間一睡する事に同意しました。しかし、目が覚めた時には 12 時になっていました。その後、発表資料の完成に向けて考え続けました。幸いな事に、昼食の時間ですので、食事を取りました。

休憩を終えた後、60%くらいまで完成した発表資料の作成を続けました。午後 3 時になると、ゲストハウスに戻らなければならないので作業を停止しました。

前夜とは違って、今夜は午後 7 時にゲストハウスに集まり、また終了していない発表資料を完成させました。夜遅い時間に作り終わって、発表資料について榊原先生に相談しました。効果的な相談の結果、最終的には発表の準備が最大 80%まで完了しました。

県の事務所での発表

今日、私達はフィールドに行きませんでした。その代わり、朝から当日の発表の準備を完了するために、ゲストハウスに集まりました。私達は、これからみんなに見せようとしている発表の構造とデザインの準備に取り組みました。この準備は午前 8 時 50 分に完了しました。

その後、持って行く物を準備し、ボネ・ボランゴ県エリアにあるリージェントパターンスペースに行く準備ができました。午前 10 時に、県庁の部屋に到着しました。そこで村の役人や他の招待客と会いました。

ロンボンゴグループは発表の準備をしているようでした。スピーチの後、彼らは自分達の作品を発表しました。ロンボンゴグループの発表では、最初に英語、次にインドネシア語に翻訳する形で 2 つの言語を順番に使用しました。彼らは質問に答える事ができて、その発表はうまくいきました。発表の終了後に、昼食を取りました。

その後、私達は他の学生と講師と一緒に写真撮影をしました。写真撮影の後、私達はゴロンタロ県事務所の別の部屋へ尋ねました。午後 2 時になり、村長や環境部などのゲストを待っている間に発表用の部屋を用意しました。

すべての準備が整うと、イベントが始まりました。開会式の発言と開会式から始まり、フタダアグループは最初の発表を行いました。フタダアグループは英語とインドネシア語の交互に用いるパターンで発表し、スムーズに発表できたので、地区政府から良いフィードバックを得ました。

その後、私達西ペンタディオグループより「グローバルジオパークゴロンタロのジオサイトとしての観光開発したペンタディオ温泉」をテーマにした発表が行われまし

た。発表の瞬間、少し緊張しましたが、とても幸せでした。グループの活動の概要を表示すると、拍手が寄せられました。

発表の主な内容として、最初に、小学生をペンタディオリゾートエリアの清掃に招待した事を示しました。次に、西ペンタディオ周辺のコミュニティと村の役人との会議を開催する事について示しました。基本的に、この会議の目的は、地元の村の役人に住民の願望について耳を傾けることでした。最後に、ペンタディオリゾートに関する情報をみんなに提供して来訪者の数を増やすために、私達が公開したウェブサイトの作成に関するアイデアを提示しました。そして発表の最後に、西ペンタディオ地域の住民がまだ実行している悪い習慣に関するデータが追加されることを付け加えました。

その後、イロティデアグループが、他のグループと同様に英語とインドネシア語を用いてグループの活動の結果を発表しました。イロティデアグループの発表は、彼らが見つけた問題を大声でしっかりと説明したので、興奮させました。イロティデアグループもアドバイス、質問、拍手などを受けました。全部の発表終了後、夜に夕食会が開かれました。

各グループの発表は完全に評価され、順位が決まりました。今夜の夕食後に、評価結果の発表になります。夕食を食べながら、グループ発表の勝者のアナウンスを聞きました。 私達の西ペンタディオグループが 1 位、ロンボンゴグループが 2 位を獲得しました。その後、各参加者は賞品を受け取りました。インドネシアの学生は榊原先生から商品を受け取りました。しばらくしてイベントは終了し、私達学生は写真撮影を続けて一緒に歌を歌いました。その後、宿泊先に戻りました。

ヴァイキーの家での夕食

図 4.8 ヴァイキーの家で夕食後に撮影した集合写真

2018 年 9 月 8 日土曜日の午後 5 時に、私達はゲストハウスに集まり、ヴァイキーの家で夕食を食べるために、5 台の車で彼の家に向かいました。ゲストハウスから彼の家に行くのに 1 時間かかりました。 ヴァイキーの家に到着すると、私達を彼の家族が温かく出迎えてくれました。遠慮をすることなく、提供されたディナーを美味しくいただきました。 日本の学生と李先生は、食べ物が辛くなく、美味しかったので、幸せそうに食事をしていました。

満腹になった後、ストーリーテリングとゲームが登場しました。誰かがトランプをしていて、榊原先生が「心の友」という歌を歌っていました。時間がたって、みんなはすでに午後 9 時である事に気が付きませんでした。その後、榊原先生は日本からの学生を宿に帰るように指示し、最後に別れを告げてゲストハウスに戻りました。

さよなら愛媛チーム

2018 年 9 月 9 日日曜日は、日本人とインドネシア人の学生の別れの日でした。

地域社会共同サービス活動は午前 9 時に終了しました。地域社会共同サービス活動の参加者は、日本人の友人をジャラルディン空港に見送りました。

空港への移動は約 1 時間かかります。時間があっという間に過ぎたので、私達は悲しく感じました。一緒に過ごしたこの 12 日間は十分ではありませんでした。私達の心の中では、昨日会ったばかりで、突然別れる事になったようなものでした。インドネシアの学生の中には、記念品を渡す人もいました。それから一緒に写真を撮りました。

榊原先生は、それぞれ結成されたプログラム（特に西ペンタディオグループ）を継続するようアドバイスしました。先生は、私達が提供するウェブサイトが訪問者にとって有益であるかどうかを回答できるように、ペンタディオリゾートでのリンボト湖祭りに参加した方が良いと言いました。その後、日本の学生、榊原先生と李先生は、母国である日本への離陸のためのチェックインをしに空港に入りました。

さよなら、日本の友達、榊原先生、李先生。皆さんの成功を願っており、いつかまた再会する事を願っています。皆さん、協力していただき、知識を共有していただきありがとうございました。

第 5 部

ロンボンゴ村における私たちのストーリー
観光産業のポテンシャルがある村

2018 年 8 月 25 日土曜日は、ロンボンゴグループにとって、特別な思い出がある日です。なぜなら、その日の午後に、ロンボンゴグループのストーリーが始まったからです。

図 5.1　インドネシア、UNG の学生達と愛媛大学の学生達の初対面

選択段階を通過し、さまざまな要件を満たした結果、この地域社会共同サービス活動に参加する事ができ、日本の学生達と会える今が来ました。私達がこのプログラムを体験するのも、みんなと会うのも初めてでした。その日の午後は、まだゴロンタロはまだ暑かったです。でも幸いなことに、アズキアゲストハウスには屋根付きのオープンスペースがあり、正午の暑さでも快適でした。しばらくすると、日本からの地域社会共同サービス活動の 11 名の参加者がゲストハウスに到着しました。日本からの学生達と UNG からの地域社会共同サービス活動の学生 12 名と顔を合わせるのは今回が初めてでした。今年度の KKN Collaborative の参加者の数は合計で 23 名でした。

最初の会議は、日本のチームと UNG のチームの間に隔たりがあるかのように少しぎこちなく感じました。榊原先生からの指示を受ける前に、私達は地域社会共同サービス活動を実行する場所に従って 4 つの小さなグループに分かれました。私達のグル

ープは、ボネ・ボランゴ県、スワワ中部地区のロンボンゴ村で地域社会共同サービス活動を開催することになりました。

ロンボンゴグループは、ボネ・ボランゴ県に配置された唯一のグループでした。他の 3 つのグループはゴロンタロ県に配置されました。私達のグループは、日本の学生 3 名と UNG 学生 3 名で構成されました。日本の愛媛大学から山下蓮さん、檜垣明里さん、町戸志帆さん、インドネシアの UNG から Arif Pranata（アリフ・プラナタ）さん、Frismawati（フリスマワティ）さん、Giska（ギスカ）さんが参加しました。地域社会共同サービス活動を行う際、ティーチングアシスタント 1 名が同行しました。

グループ作成後、グループごとに座り、榊原先生の指示を受けました。その後、お互いのことを知るために、グループメンバー同士自己紹介をしました。最初におこなった事は、ロンボンゴ村で実施される活動の計画について話し合う事でした。日本の学生達にインドネシアに出発する前の準備について尋ねると、彼らの答えに私達は驚きました。なぜなら明らかに、日本の学生達は、これから活動するコミュニティについて特別な準備をしていなかったからです。準備をしてこなかった理由は、ゴロンタロで結成した地域社会共同サービス活動グループで議論するからでした。私達は、きっと日本の学生達は事前にゴロンタロ社会の特徴を研究したり、又はここで地域社会共同サービス活動の実装の援助となる他の事も学んできたと思っていました。どうやら、私達の考えは間違っていました。

一方で、このプログラムの成功のために UNG の学生達は特別な準備を事前に行っていました。以前、他の UNG の学生達が、KKN Collaborative を通じてロンボンゴ村の予備調査を実施しました。そのため、UNG の学生はロンボンゴ村についての知識を持っており、調査の事前説明として日本の学生達に情報共有しました。又、UNG の学生が、ロンボンゴ村の状態の写真を日本の学生に見せました。日本の学生達はロンボンゴ村が観光地である説明を聞いたとき、この村へ調査に行けることに対して、とても幸運だと感じ、フィールドに早く行きたいようでした。

彼らは日本から何時間も飛行機に乗っていたため、疲れ果てていたようで、最初の会議は非常に短いものでした。もちろん、KKN Collaborative プログラムを実行できるように体調を回復するにはしっかりと長い休憩が必要です。それでも、グループメンバー間の親密さをより高めるために、日曜日の朝に運動を行い、ゴロンタロ市周辺の興味深い場所を訪問することを約束しました。初日の会議は日本の学生に良い印象を与えたので、彼らはゴロンタロで行われるこの KKN Collaborative プログラムに非常に関心を持っているようでした。

ナニ・ワルタボネにて朝の運動

図 5.2　アリーナに朝散歩後、「Dulohupa（デュロフパ）」の前で記念写真

早朝、私達はゲランガング(アリーナ)・ナニ・ワルタボネに行きました。ゴロンタロ市の涼しい朝の空気を楽しみました。これは日本の学生にとって初めての経験でした。山下蓮さんと友人達は、ゴロンタロの朝の美しさを楽しみ、リフレッシュできたことを幸せに感じていました。アリーナでしばらくジョギングしながら、ゴロンタロの美しさを伝えました。ゴロンタロの歴史、つまりゴロンタロが新しい州に発展していくことについて話した時、特にゴロンタロの美しい写真を見せたとき、日本の学生達は非常に興味を持ちました。私達は、10 周以上を走ったことを忘れるくらいまで、長い時間話しました。日本の学生達はアリーナの場所にあるすべての建物を覚えているようでした。又、私達もすべてを詳細に説明しました。

それだけでなく、ゴロンタロ市立公園も訪問することにしました。そこで日本の学生達は、アウトバウンドのコンセプトで英語を学ぶ子供たちの熱意ある姿を見ました。私達はこのシーンの写真を思い出として残す事にしました。アリーナとゴロンタロ市の公園を巡って疲れた私達は、山下蓮さんと他の友人達に新鮮なココナッツを楽しんでもらいました。山下蓮さん、檜垣明里さん、町戸志帆さんは、果実から直接新鮮なココナッツを楽しむのは初めてでした。しかし、残念ながら、ゴロンタロの伝統的なケーキを勧めたとき、彼らは丁寧に断りました。彼らは満腹だったようです。最終的に、日本人は特定の時間に応じて食べる習慣があることを聞いて、ユニークだなと感じました。この事はゴロンタロの文化とは大きく異なります。インドネシアの人々は、いつでも、どこでも食事をすることができ、特に決まったスケジュールはありません。

スポーツを終えて食事を楽しんだ後、ゲストハウスに戻りました。私達はしばらく休憩を取る事にして、次の目的地への旅行の準備をしました。

その日の午後 3 時に、日本の学生が滞在するゲストハウスに集まる事にし、次の目的地に行く前の待ち合わせ場所としました。

次の観光地はオタナハ要塞でした。そこではゴロンタロの美しさを楽しむ事ができました。また、この旅行の主な目的はグループのメンバー間の親密さを確立することでした。オタナハ要塞に到着してみると、ツアーの目的地としてオタナハ要塞を選んだ他のグループメンバーにも会いました。

図 5.3　愛媛大学の学生がとても美しいと言ったオタナハ要塞

オタナハ要塞を楽しんでいた時、私達の友情はとても深まっていました。みんなで一緒に大声で笑うことさえできました。もちろん、この大切な瞬間をみんなで写真をとって共有することができました。オタナハ要塞を眺めながら、UNG の学生はますます細長くなり、浅くなっているリンボト湖の状態について説明し、社会がリンボト湖を利用した事を伝えました。また、ゴロンタロにあるヤシの木の数を日本の学生に示しました。 オタナハ要塞の頂上からは、ココナッツとバナナの木がとても豊かに植えている景色が見えました。日本の学生は、母国ではココナッツとバナナの木を見られるのはまれであることを教えてくれました。彼らはバナナが大好きですが、日本のバナナの価格は非常に高いので、満足できるまでバナナを食べる事ができるゴロンタロがどれほど素晴らしいかと言いました。これは、UNG の学生にとって、ゴロンタロの驚く程豊富な果実たちに感謝するよう、もう一度考えなおすべきだと思いました。

オタナハ要塞周辺を散歩した際、ゴロンタロの伝統的な服を着て写真を撮っていたモデルさんに偶然出会いました。UNG の学生がゴロンタロの伝統的な衣服について説明するのにふさわしい瞬間でした。案の定、日本の学生はゴロンタロの伝統的な服に魅了されたようでした。

図 5.4　ゴロンタロの伝統的な服を着ていたモデルさんと写真撮影

伝統的な市場へ散歩

オタナハ要塞の美しさを楽しんだ後、伝統的な市場へ旅を続けました。この決定は、ゴロンタロの伝統的な市場を訪れる事を切望していた日本の学生の希望に沿ったものでした。午後 6 時に、私達は市場に向かいました。日本人学生の話によると、初めて見る新しい物が多いようでした。

日本の学生は、当時のユニークな市場の写真を熱心に撮りました。 UNG の学生は市場で販売されていた色んな種類の魚、多種類の野菜、ユニークなフルーツを見て驚く日本人学生の行動を興味深く見ていました。また、現地の伝統的な市場を訪れる人々は、彼らの行動に驚きました。

図 5.5　市場で熱心にインタビューする山下蓮

日本の学生は、伝統的な市場に興味があったので、UNG の学生に市場で入手できる野菜やフルーツの数などについて興味津々で尋ねました。UNG の学生は、野菜やフルーツの構成も含めて、すべての質問に答えました。日本の学生は市場でフルーツを買う事に夢中になり、シェアされたすべてのフルーツをほめました。これらのフルーツは日本の学生にとって、初めて味わうフルーツでした。また、可能であれば、フルーツを日本に持ち込みたいと最初は言っていましたが、残念な事に、そのプロセスは非常に複雑であるため、日本にフルーツを持ち込めないと教えました。

伝統的な市場を体験し、フルーツに夢中だった全員は、お腹が空いている事に気がついて、Wong Solo（ウォン・ソロ）というレストランに行く事にしました。この飲食店では、さまざまなメニューを販売していました。UNG の学生がリードしたおかげで、日本人の学生はより多様な食べ物を選ぶことができました。レストランでは、フードメニューの選択に迷って、全員の注文を完了するのに 1 時間かかりました。

夕食を一緒にする事で、雰囲気がさらに親密になりました。また、自分が注文されていない他の料理も味わうことができるように、お互いの料理をシェアしました。辛い料理を食べるのが好きな岩本妃来羅さんを除いて、ほとんどすべての日本の学生は辛いメニューを好みませんでした。

全員がそれぞれ食事を終えた後、食事代を支払うためにお金を集めました。各人の請求書を計算するのは時間がとてもかかります。そのとき、みんな疲れていたので、日本の学生は 1 名あたり Rp.50,000 を徴収することに決め、残りをインドネシアの学生が支払いました。実際にはそうする事によって、日本の学生が多くお金を支払いましたが、彼らは今日の旅行に非常に疲れていたので、その方法で支払う事にしました。その後、私達はやっと自分の場所に戻りました。

KKN Collaborative の開会式

今日、2018 年 8 月 27 日月曜日は、インドネシアの UNG と日本の愛媛大学の地域社会共同サービス活動の最初の実施日でした。午前 8 時前に、地域社会共同サービス活動に参加する学生達が LPPM UNG ビルに集合しました。プログラム活動のオープニングアジェンダは、午前 8 時に始まりました。

図 5.6　大学のリーダー達による UNG 学長ビルでの KKN Collaborative の開会式

プログラムの開会式には、UNG の第 1 副学長、Mahludin Baruadi（マハルディン・バルアディ）教授、愛媛大学の代表者、榊原教授と李准教授、LPPM UNG の代表者、議長 Fenty U. Puluhulawa 教授（フェンティ・U・プルフラワ）と LPPM UNG の秘書、Dr. Lukman Laliyo（ルクマン・ラリヨ氏）と他に KKN Collaborative の指導者らが出席しました。このイベントは、LPPM UNG ビルで開催され、UNG の第 1 副学長によって開催されました。開会式の終了後に、私達は学長ビルに向かい、そこで集合写真を撮りました。

同日の午前 9 時に、ロンボンゴグループは、現在の活動を支援するティーチングアシスタント 1 名を伴って、初めてロンボンゴの村に出発しました。ロンボンゴ村に行く前に、まず地区事務所に向かい、メンバーの自己紹介をし、地区長の指示を求めました。

図 5.7　日本の学生と中央スワワ地区での写真撮影

私達は中央スワワ地区部長に温かく迎えられました。みなでの議論中、ゴロンタロの伝統的なケーキを提供していただきました。私達は、現在の地域のロンボンゴの政策を含め、特に地区政府の観点から見たロンボンゴの状態に関してたくさんのことを一緒に議論しました。さらに、ロンボンゴの経済状況、健康、インフラ、環境、教育の状況についても多くの質問をしました。しかし、限られた時間であまりお話しができないため、小地区長はロンボンゴ村事務所の政府データベースで詳細な情報を入手するよう提案してくれました。議論の後、私達は地区事務所長のすべてのスタッフと一緒に写真とって、ロンボンゴ村事務所を案内してもらいました。

図 5.8　中央スワワ地区部長の部屋で行った議論の様子

ロンボンゴ村事務所では、先に伺った地区の事務所からの歓迎と同様の手厚いおもてなしを受けました。私達はすぐに「お父さん」（ゴロンタロ社会では、村長をお父さんと呼びます）による質疑応答のフォーラムに招待されました。私達はこの機会を利用して、先の地区と議論が途中になっていたロンボンゴの村について多くの質問をしました。

KKN Collaborative の参加者は、ロンボンゴ村の役人との初めての会議に非常に熱心に取り組みました。日本人とインドネシア人の学生から質問がたくさんありました。村の役人と上手くコミュニケーションをとるために、日本人の学生は英語を使用し、村の役人が理解できるようにそれをインドネシアの学生はインドネシア語に翻訳しました。

議論では、私達が最も興味のあるロンボンゴの村の観光スポット、ロンボンゴリゾートの管理についてたくさん質問しました。議論で、私達が得られた情報の質をより高めるために、インドネシアの学生は村の役人のそれぞれの答えを深く掘り下げしました。実際の観察が必要だと私たちが合意した点は、まず、ロンボンゴリゾートへの訪問者の数でした。訪問者数は毎週 1,000～2,000 名の数に達していると聞きました。第二に、ロンボンゴで鉄砲水が発生した後、集中的に実施される修復努力に関する点、第三に、村当局からの強力な声明によると、ロンボンゴの資産の一部が州政府に属しているため、ロンボンゴ村の政府はロンボンゴの管理に干渉しない、ロンボンゴの管理は観光局に責任があるという点でした。

また、ロンボンゴの住民の経済と雇用状態についても質問しました。村の役人のデータと説明によると、ロンボンゴの住民の大半は農民である事が判明しました。2 番目の質問は環境状態と環境問題についてでした。答えは、ファシリティ不足や住民自体の認識に起因するゴミなどの一般的な環境問題でした。今日、村政府から入手したすべての情報を検討すると、「現場で直接観察と議論を実行する場合、違う結果が出て来る可能性があると考えて観察する必要がある」という意見になりました。

村の事務所の村長と役人との会議を開いた後、ロンボンゴ村の問題のリストを作成するために議論を行いました。村の事務所では、議論する特別な場所が用意されていました。皆は、村の役人によって特別なゲストとして扱われ、私達の議論が快適に行われるよう、飲み物やスナックなどを提供してくれました。議論の結果から、村の事務所から得たデータをどのようにフォローアップするかを検討することにしました。私達は、現場で数日間、サービス学習の実装活動ができるように、様々なフィールドワークプログラムの計画を立てました。最初のステップとして、私達はコミュニティを訪問し、ロンボンゴ村の問題について話し合うことにしました。次に、私達は既存の問題を解決する目的で、村の役人やコミュニティとともに解決策を一緒に作成します。今日は活動の初日であるため、私達の決定が最良のステップと思考しました。今後は、さらに多くのアイデアを開発することになりました。

村から帰って、LPPM にて再び議論するにはまだ早いので、この時間を使用して、コミュニティに村の経済、雇用状態、教育、および環境問題への対応についてインタビューするように決定しました。

図 5.9　ロンボンゴグループのディスカッションの様子

しかし、残念な事に、私達は 1 つの世帯にしかインタビューできませんでした。そのインタビューではロンボンゴ村の問題に関する多くの話を聞きました。不十分な経済状況、不確実な社会の雇用率、および教育レベルの低下などの問題について話を聞きました。また、鉱山労働者として働いている男性の数と観光業の管理などの問題は不適切であると述べました。

午後 5 時になり、私達はそんなに時間が経った事に気がつきませんでした。現地での活動を終了し、キャンパスに戻る時でした。私達は LPPM UNG に戻り、今日の活動より得られた、データの形での情報やロンボンゴ村の問題に関連する他の物事について議論を行いました。

ロンボンゴ村での住人へのインタビュー

時間を尊重する文化である日本の学生とインドネシアの学生は互いに異なる文化を持っていました。しかし、インドネシアの学生は常に時間通りに来る事で、お互いのバランスをとるよう頑張っていました。UNG の学生は必ず、午前 8 時に、日本人学生が滞在するウィスマアズキヤに時間通りに集まりました。この新しい習慣は、UNG の学生に対して実践と適応の形でした。

すべての準備が整った後、私達はロンボンゴ村に向かいました。村に到着した後、昨日行った途中の議論を続けました。私達は役人の情報と住民 1 名のインタビューより、この村の主な問題は環境問題であると予想して、それを真剣に管理する必要があると決定しました。

最初のステップは、観光村のロンボンゴ温泉を訪問する事です。

これから行うインタビューのために質問のリストをまとめました。

質問の項目は次のとおりです。

1.ロンボンゴ温泉に対する公共の印象

2.ロンボンゴ温泉を訪れる地域コミュニティの頻度

3.ロンボンゴ観光の存在に対する地域社会の期待

4.ロンボンゴ温泉周辺の清潔の状態・ゴミの状態

5.ロンボンゴの公共施設の利用可能性

6.これから実行するインタビューで明らかになると予想できる、ロンボンゴコミュニティ周辺の環境問題に関連する他の物事

時間を節約できるように、私達のグループを 3 つのチームに分かれました。ロンボンゴ村は 4 つの村落で構成されていて、町戸志帆さんと Frismarwati（フリスマルワティ）さんが村落第２の担当、山下蓮さんと Giska(ギスカ)さんが村落第３の担当、檜垣明里さんと Arif Pranata Mustapa さんが村落第４の担当 としてそれぞれ分かれました。村落第 1 は村事務所の近くにあるため、村落第 1 へは最後に訪問するよう計画しました。その後、私達は割り当てられた村を訪問するためにそれぞれ出発しました。

ロンボンゴ村の４つの村落の住民 40 人にインタビューを行い、データを得ました。参加者はランダムに選択しました。インタビューの結果より、ロンボンゴ村には多様で複雑な問題が発生している事がわかりました。それで、プログラムのこの短時間の範囲では、全ての問題の解決は不可能であると理解しました。

図 5.10　周辺コミュニティへのインタビュー

そのため、ロンボンゴの村の環境問題の原因を調べた結果、それはステークホルダーとコミュニティの間のコミュニケーション不足から生まれた事が分かりました。

図 5.11　周辺コミュニティへのインタビュー

インタビューを受けたコミュニティはもしこれらの問題を政府に告発しても、問題の解決のためフォローしてくれないと感じているようでした。政府に告発することに嫌気がさしてきていると言う人さえもいました。また、彼らの話によると、最終的には政府の対応を待って、自分達が反対する決定でも、政府が決定した事だから、嫌でもそれを受け入れるしかないとのことでした。

図 5.12　汗だくになりながら村民の家を訪問する様子

今日はとても疲れました。天候はひどく猛暑で、インタビューは午後、太陽が刺さるような暑さの時間に行われました。しかし、情熱的な熱意を持って、私達は家ごとに尋ねて歩き回りました。

みんなの服が汗で濡れていた事に気づきませんでした。インドネシアの学生は、インタビューをしている際のコミュニティの態度に関して、日本の学生に申し訳ないと感じました。なぜなら、一部の村の人は、質問に答えたくないと述べたからでした。しかし、それに対して、日本の学生達は大丈夫だと言っていましたが、彼らの心には失望感があると感じました。

暑い太陽の下を歩いてロンボンゴ村の村落を探索する事は、非常に意味のある苦労でした。探索はやっと午後 3 時に終わりました。その後、LPPM UNG に戻り、午後 5 時までインタビューの結果に関する議論を行いました。

LPPM を出た後、昨晩日本の学生達が宿泊したゲストハウスに戻りました。 ゲストハウスでは、いくつかのグループが議論を続けていて、他のグループは UNG の学生が帰るまで、お互いに冗談を言って話している姿も見られました。

ロンボンゴ村の商人へのインタビュー

今日はロンボンゴ村で活動している KKN プログラムの 3 日目です。いつも通り、アズキアゲストハウスを朝８時に出発して、ロンボンゴ村事務所へ向かいました。何人かの生徒は夜更かしに慣れていたので、まだ眠そうでしたが、それでも私たちのやる気が失われることはありませんでした。

ロンボンゴ村事務所に到着した時、私達の今日の活動を議論から始めました。議論中、ロンボンゴ温泉の商人へ最初のインタビューを行うというアイデアが突然浮かびました。商人にインタビューすることで、ロンボンゴの観光地の問題が発見できるかもしれません。

最後に、インタビューの質問のドラフトを作成しました。これは、後でフィールドのガイドラインになります。私達のグループがデザインした質問のコンセプトは、清潔さ、設備を含む前年度から現在までのロンボンゴ観光産業の発達についての国民の意見を解明する事でした。インタビューの質問のドラフトはその日のうちに完成しました。

私達はすぐに、フィールドへ急いで行きました。インタビューを実施した結果、大多数のゴミが散乱し、廃棄物管理に対する関連機関の注意が足りていない状態から、ロンボンゴ観光所の清潔はもはや良くないとほとんどの人が回答しました。

また、同じ場所で、観光局の役員・マネージャーに、私たちのミッションについて、そしてロンボンゴ観光発達計画についてインタビューしました。また、ロンボンゴ村

とロンボンゴ観光産業で見つかった問題を伝えました。それから、観光局とロンボンゴ村の問題解決に私達が参加する方法について話し合いました。

次に、データについて議論し、昨日得たインタビューの結果に関連付けました。 これは、ロンボンゴ村の一般的な問題の目録作成を容易にするために行いました。 発見された問題は、優先度の尺度を決定するために解析しました。そうすることによって、どの問題に焦点を当てるかを判断でき、すぐに解決策を見つけることができるからです。

ちょうど午後 3 時になり、帰る時間でした。私達は LPPM UNG に戻らず、ゲストハウスに帰って、議論が終わるまで続けました。、ゲストハウスで議論をしている他の友人も見つけました。議論の後、UNG の学生の何人かは、他のグループと一緒に外で夕食をとり、家に戻る前の時間を過ごしました。

図 5.13　市場でインタビューしている様子

計画作成とプログラムのアレンジ

今日、プログラム活動 4 日目となり前日と同様に、アズキアゲストハウスに集合し、日本の学生と一緒にロンボンゴ村へ行きました。村に到着するまで、30 分かかりました。移動中、自分の事を話したり、グループのメンバーについて色々な事を聞いたりしていました。

村に着いた時、私達が行ったインタビューの結果について議論しました。全員、ロンボンゴ村の問題が完全には明らかになっていない事に同意しました。政府と地域コミュニティの間には、良好なコミュニケーションの欠如に起因する異なる信念がありました。 この文脈での政府とは、地方政府と村政府を示唆しています。

村政府は、ロンボンゴ観光管理に関連する不平等がある事を認めるが、コミュニティのために自分がすべき事をしたいと考えていました。それは、「村の政府はコミュニティに最大限の貢献をしてくれていない」と考えているコミュニティの考えとは異なっていました。

最終的に、ステークホルダーとコミュニティの間でコミュニケーションをとり、ロンボンゴ村自体の問題を解決するための解決策を特定し、見つけ、一緒に決定する必要があると考えました。そのため、ロンボンゴ村と関連するすべてのステークホルダーとロンボンゴ村のコミュニティが話し合える会議を開催することにしました。

私達は、翌日に実施される会議の計画を立て始めました。まず、会議に招待する当事者を特定することにしました。最終的に、中央スワワ地区政府、ロンボンゴ村政府、ボネ・ボランゴ県環境庁、ボネ・ボランゴ県ツアーエージェンシー、ロンボンゴの売り手、カランタルナ村の各村落の代表者を含むステークホルダーを招待することに決定しました。

計画を整理した後、私達はすぐにこの計画を村と話し合い、各村からコミュニティを招待するための助けを求めました。他の関係者との議論を行い、金曜日に行う会議に招待するために、私たちはすぐに出発しました。最初にロンボンゴの販売業者から尋ね、最後にボネ・ボランゴ県・環境部を尋ねました。

午後 3 時に、全ての関係者へ招待が終了しました。その後、アズキヤに戻り、明日の会議の準備について、議論を行いました。

ロンボンゴ村で開催したステークホルダーとコミュニティ

今日は、地域社会共同サービス活動の 5 日目です。午前 9 時に開催される会議の準備に、早めに出発しました。会議場では、参加者の席はまだ空いていましたが、それでも、参加者を待って、椅子に座っているステークホルダーもいました。

図 5.15　ステークホルダーとロンボンゴ村コミュニティの合同会議

会議は 10 時ごろに開始しました。学生からの自己紹介から始まり、それから私達が招待した関係者へと続きました。私達は、コミュニティのすべての苦情に対応できるように、この合同会議を可能な限り、うまくいくように調整しました。このため、会議の雰囲気は正式に計画されていませんでした。インドネシアの学生は会議の司会をして、コミュニティの苦情を伝えるため社会と政府の構成員を招待しました。

会議が先に進む前に、インドネシアの学生はロンボンゴ村でどんな活動をしたかを伝え、地域社会共同サービス活動の実行方法について説明しました。なぜなら、コミュニティの人々は、KKN プログラムがキャンパスでしばしば開催される KKS プログラムと同じだと思っているからです。

会議では、日本の学生達が発表のスライドを通して日本の成功した観光名所について説明しました。私達は、日本では観光名所がコミュニティと政府によって完全に管理されている事を国民と関係者に知ってもらうために紹介しました。全員の心を開く事で、ロンボンゴ村を観光地に発展させる機会として、特別なアイデアの出現を刺激できる事を願っていました。

議論では、多くの人々が環境問題、設備、経済、そして観光の問題について苦情を述べました。一部の人は、ゴミの問題が環境問題を引き起こす事をすでに認識していると言いました。しかし、ゴミ箱やごみ収集車などをサポートする設備がないため、ゴミを木の下で燃やしていました。最も深刻なケースは、コミュニティがゴミ問題は自分たちの義務ではなく、政府の義務であると考え、ゴミの問題を気にしていない事でした。

これはロンボンゴの観光地の場合とは異なり、売り手はゴミを集めて場所をきれいにするために最大限の努力をしています。しかし、誰もゴミを集めなかったため、最終的には燃やすことにしました。廃棄物を燃やすという行為は、多くの場合木の下で実行されています。ロンボンゴの観光名所は、保護されている森林環境にあるため、ゴミを燃やすと、森林火災や大気汚染を引き起こすリスクが非常に高くなります。実際には、観光名所のコンセプトは、訪問者を常に快適にしなければなりません。なので、この状態はそのコンセプトに確実に反していました。

それに加えて、ロンボンゴの観光スポットで売り手として働いている一部の人々も、観光スポットの設備がない事に苦情を述べて、ロンボンゴ村のコミュニティの経済に影響を与える事を示しました。ロンボンゴ観光の議論から興味深いことが分かりました。この観光スポットは州の観光局によって管理されているということです。ロンボンゴの名前は借用された名前です。ロンボンゴの人々、村の政府でさえ、その管理に関与していません。したがって、ロンボンゴの観光名所の存在は、実際には経済的な影響を与えていません。コミュニティからの質問は最終的に地区政府によって回答されました。　以下は地区政府からの回答です。

1.ロンボンゴ村のコミュニティの環境におけるゴミ問題について、環境局はゴミ箱を増加し、定期的にゴミを拾います。ただし、ゴミ対策の実装には時間がかかります。村政府は、まず地区環境庁に対応しなければなりません。

2.観光名所の管理問題について、コミュニティと村政府はその管理に関与することを望んでいます。これに関して、観光局は、観光名所の管理は州政府の政策であるため、決定できないと伝えていました。また、ロンボンゴの観光スポットは、地方の規制によって規制されている州政府の資産であることが知られています。その管理は、各地区の観光局に任命されています。

このように示した声明に応えて、村政府とコミュニティは当然政府の政策を受け入れなければなりませんでした。しかし、私達がこのロンボンゴの観光地の管理に参加できるということは、コミュニティと村政府にとって大きな希望となります。

会議は午後 2 時に終了し、ゲストハウスに帰る準備をしました。帰る前に、使用前の状態になるまで部屋を掃除しました。部屋の周りのゴミもきれいにしました。帰り道で、私達は観光名所の管理の課題について少し話しました。その中で、関連当事者間のコミュニケーションを改善する必要があるというアイデアを得ました。その改善ができれば、観光部門や州だけでなく、地方の組織もロンボンゴの観光名所の影響を受ける事ができるからです。

UNG の dies natalies イベントに参加

日本の学生の到着は、USG の一連の記念イベントと同時刻でした。この 5 日目には、UNG の誕生イベントとパレードに参加する準備が午前中に整いました。特に日本人学生は、パレードの前に、日本の伝統舞踊とモダンダンスを「浴衣」と呼ばれる伝統的な衣装を着て行いました。パレードの後、私達はキャンパスでゴロンタロの伝統的な料理を食べ、短い休憩を取るために帰りました。その後、ロンボンゴでプログラムの活動を続けました。

図 5.16　日本とゴロンタロの伝統的な衣装を着て UNG の dies natalies （記念）イベントに参加したときの様子

その日の午後 2 時頃、解決策を調べるためにどの問題を選択するのかについて再度議論しました。最終的に、ロンボンゴ観光スポットの問題について解決策を調査することになりました。

私達は、再び観光名所を訪れて、環境を観察し、観光名所の訪問者にインタビューする計画を立てました。この観光スポットは訪問者の多い時が週末だけだったので、土曜日（今日）に訪問する事にしました。この観察フィールドへは休暇に行く感じでした。私たちが訪問することを聞いた他のグループメンバーはどうやら、ロンボンゴの観光公園に行きたかったようで、一緒に行くことになりました。他のグループも参加する事になったのでわくわくしました。

図 5.17　Hutada'a(フタダア)グループとロンボンゴでの楽しい時間

私達が到着した時、訪問者はそれほど多くいませんでした。プール自体の清潔さについては、かなり良かったと言えますが、環境については、特に観光エリアの川岸で、散らばったゴミがある事が分かりました。ゴミは最適に処分されていないようでした。それらのゴミ以外に、ダンボールも捨ててありました。休暇を楽しみながら、訪問者にインタビューを行うと、ほとんどの訪問者がこの場所の清潔さに不満を持っていました。２番目に訪問者が感じている問題点は設備についてでした。そして、3 番目の問題点はセキュリティなどのその他のものについてでした。 しかし、一番は衛生問題でした。

午後 6 時半になり、家に帰る時間でしたが、日本の学生はすぐにゲストハウスに戻らず、夕食を取るためにピノのレストランに向かう UNG の学生と合流しました。その後、日本の学生のゲストハウスに向かい、UNG 学生はそれぞれの家に戻りました。

図 5.18　ロンボンゴの観察と休暇で交流を深めるフタダアグループメンバーたち

発表資料を集めて、発表の準備を行う

6 日目に私達はいつものように朝 8 時にアズキアゲストハウスからロンボンゴの村事務所に行きました。約 45 分かかりました。ロンボンゴ村事務所に到着し、金曜日に行った会議の結果を検討するため、議論を行いました。私達は、この会議の議論から得られた結果に基づいて、プログラムを作成しました。

観察の終了後に、ボネ・ボランゴ県政府にフィールド調査結果をプレゼンする必要があるため、私達はパワーポイントプレゼンテーション用の資料を準備し始めました。資料データのソースは、村政府からのデータベースおよび住民とのインタビューの結果でした。しかし、発生している問題に対処するための解決策はまだ決定していませんでした。

その後、私達が得た議論の報告書を、いろいろな政府機関に提出しました。最初に、私達は報告書を観光庁に提出しました。コミュニティや関連機関との共同会議から生まれるプロジェクトの事を紹介し、これについて同意してもらおうとしましたその結果、私達が設計したプログラムの実装を完全にサポートすることに同意してくださいました。ロンボンゴの観光管理として活動している観光代理店は楽観的な意見を述べました。このような活動がうまくいけば、観光開発も良くなります。しかし、彼らによると、私たちの今行っている活動が終了した後、このプログラムを継続するためにコミュニティの参加を増やすことができるかが問題であると話していました。

環境サービス機関も同じ意見を述べました。環境サービス機関もこのプログラムを熱心にサポートしますが、プログラムに対してロンボンゴのコミュニティの対応とプログラム終了後、コミュニティ自身がプログラムを継続するのが難しいと考えていました。

しかし、私達はこの地域社会共同サービス活動が既存の問題解決に役立つ可能性があるとポジティブにとらえていました。討論の際、私達はロンボンゴの村の未来のために、このプログラムが存在しなければならない事をコミュニティに納得してもらえるよう、計画を立てました。

図 5.19　グループが作成したプロジェクトを説明するために環境サービス機関を訪問

有効なデータの取得、適切な解決策の発見、フィールドでの環境状態を確認するために、ロンボンゴで再度調査を行う事にしました。この調査の結果、ロンボンゴの観光環境が初日の調査時の状態とあまり変わらない事が分かりました。合同会議後にコミュニティの行動に変化があるかどうかを確認したかったのですが、明らかに前の状態と同じでした。コミュニティはまだ変わろうという主導権（イニシアチブ）を持っていませんでした。そうなると、次のステップとして、私達自身が行動を示すことになります。

私達は周囲のコミュニティに直接行ってゴミの収集を一緒に行う計画を立てました。また、これはコミュニティのゴミであり、自分たちの責任なので、村のためにこの活動には参加しなければならないと伝えました。午後 3 時に LPPM UNG に戻り、議論を続けました。

ロンボンゴの観光地の掃除

プログラムの 7 日目、私達はいつものようにロンボンゴの観光スポットに向かうために午前 8 時にアズキアゲストハウスから出発しました。ロンボンゴに到着すると、すぐにロンボンゴの観光エリアを掃除しました。ゴミを拾い、生ゴミとプラスチックゴミを分離しながら、エリアを掃除しました。この清掃活動は、売り手が観光地のゴ

ミの清掃に参加するという動機付けをするために実施しました。その清掃活動により、みんなの環境をきれいにするという意識はより向上しました。

ロンボンゴの目的地で環境の清掃活動を実施した後、私達は分別されたゴミをすぐに環境局に持ち込みました。環境局から直接 LPPM に戻り、昨日の議論続けて行いました。

図 5.20　ロンボンゴ観光エリアの清掃

ロンボンゴの観光地を再び清掃

今日はプログラムの８日目です。昨日と同様に朝 8 時にアズキアゲストハウスを出て、ロンボンゴの観光地に直接行きました。ロンボンゴに到着すると、ゴミを拾い、生ゴミとプラスチックゴミを分離しながら、ロンボンゴの観光エリアを掃除しました。この清掃活動は、実際には、周囲のコミュニティとロンボンゴの責任者全員に帰属するという意識を高めること目的としていました。活動中、私達と一緒に参加した住民から面白い話を聞きました。住民は、もし私達学生がもっと長くここにいれば、きっとロンボンゴは良くなるだろうと言いました。私達は、今少しの努力で行動する事が、将来もっと良くなるとコミュニティに説明しました。

住民はこの地域の所有者であり、この地域の責任者であるため、地域の問題の解決策についてもっと考えるべきです。住民は自分達の子供や孫の未来についてもっと考えなければなりません。住民は同じ苦しみを続けるのか、それとも変わっていけるのか、住民の目に誠実さが見られて、彼らの顔に新しい希望が現れたと私達は信じました。

図 5.21　ロンボンゴ地域でゴミを拾う

しかし、この努力はここで終わるわけにはいきません。現在のところ、この集会の影響を感じることができたので、コミュニティを議会に参加させるという努力はこの村で続けなければなりません。ロンボンゴの観光スポットで環境の清掃活動を実施した後、ロンボンゴの村事務所に直行し、活動の結果を提示するための必要なデータについてもう少し議論しました。この時、村政府は非常に協力的で、私達の活動を完全にサポートしてくれました。必要なデータが何であれ、村政府はそれをよくサポートしてくれました。その後、私達はアズキアゲストハウスに戻り、資料をすぐに準備しました。

ロンボンゴ村と別れ

朝、私達はゲストハウスに集まり、ロンボンゴ村に直接行きました。昨日のゴミ収集、ロンボンゴ観光エリアの清掃、ロンボンゴコミュニティの人々をロンボンゴの清掃活動に招待する活動を続けました。また、私達が行った努力について、周囲のコミュニティの意見を聞きました。1 人のお母さんは、「このような行動は継続する必要があり、私達のグループが村にもっと長くいることができれば、確かに非常に良い例になる」と私達の心を魅了する答えをくれました。この活動は、将来、ロンボンゴの前向きな変化に真の影響をもたらすと思います。

私達が清掃活動を行なった時、ロンボンゴのための協力に対する感謝として、いくつかの売り手がスナックをくださいました。私達がコミュニティに常に強調して伝える事は、ロンボンゴはロンボンゴのコミュニティに属しているという事です。私達は訪問者の立場です。この場所の所有者であるコミュニティがロンボンゴをよりよく維持管理する必要があります。

私達が一緒に行った行動に満足した後、昼食をとって、村の事務所に戻りました。村の事務所では、明日ボネ・ボランゴ県庁の事務所で行う発表の準備を報告しました。その時、私達は皆、お父さん（ロンボンゴの村長）と他のスタッフに別れを告げました。今日は、フィールドワークの最終日でした。

村長は、ロンボンゴ村で過去 2 週間に行った私達の活動を高く評価しました。今、ロンボンゴの村で始めた事が、将来ロンボンゴのコミュニティに良い前向きな変化をもたらす事を望んでいると言いました。また、私達が始めたステップは小さいかもしれませんが、ロンボンゴ村の住民に大きな影響を与える事を願っていると言いました。

また、私達はお父さんと他のスタッフに、会議を通して常にコミュニティとの対話を維持するようアドバイスしました。コミュニティとの出会いは、コミュニティで発生する問題を見つけるためのカギとなるため、最も重要な事です。将来的には、私達が行ったような会議が常に継続されることを願っています。最後に、私達は別れを告げ、お父さんとロンボンゴ村の事務所のスタッフ全員との写真を撮りました。この地域社会共同サービス活動の活動の実施を支援してくれた事への感謝を伝えました。

ゲストハウスに戻る前に、ロンボンゴ周辺の色んな観光地へ向かいました。特に日本の学生のために、時間を過ごし、記念として写真を撮りました。

午後 3 時にゲストハウスに戻り、活動を続けました。明日の県庁の事務所での発表の準備について議論しました。その後、私達は一緒に夕食をとり、ゲストハウスにいる他のグループと一緒に議論を続けました。日本の学生とインドネシアの学生の間で意見が異なるため、現在の議論は難しい状態でした。でも幸いな事に、私達の議論を榊原先生が仲介してくださいました。議論は午後 12 時まで続きました。

非常に疲れを感じたので、最終的に私達は眠ることに決めました。明日のため、スタミナを充電し、体をリフレッシュする必要がありました。

ボネ・ボランゴの県庁事務所にて発表

地域社会共同サービス活動の最後の締めくくりは、フィールドの調査結果と設計したプログラムの発表でした。最初に発表するグループはロンボンゴ村グループでした。発表はボネ・ボランゴ県庁の事務所ホールで行われました。この会に、県長は出席しませんでした。しかし、スワワセンターの地区長、ロンボンゴ村の村長、ボネ・ボランゴ県・観光部門、政府のその他の組織などを含む、多くの招待客が出席しました。榊原教授や Fenty U. Puluhulawa 教授（フェンティ・ユ・プルフラワ）を含む、KKN Collaborative のオーガナイザーの代表者も参加しました。

図 5.22　ボネ・ボランゴ県の地域社会共同サービス活動に関する最終発表

私達はボネ・ボランゴ県庁のアシスタント 3 に迎えられました。グループの発表の前に、Fenty U. Puluhulawa 教授（フェンティ・ユ・プルフラワ）のオープニングスピーチがありました。フェンティ・ユ・プルフラワ教授の発言では、UNG の代表として、ボネ・ボランゴ県との間に確立された協力に対する感謝を述べました。また、行われたプログラムの活動が持続可能なものになり得るという希望を述べました。榊原教授も発言し、ゴロンタロの今後 5 年間のより良い未来への希望を述べました。さらに近い将来、ジオパークプロジェクトがゴロンタロ地域でまもなく共同開発され、ボネ・ボランゴ県のいくつかのエリアがジオパークの中心になることを発表しました。

その後、ロンボンゴグループの発表が約 30 分間続きました。メンバー全員が調査結果を伝えました。日本人の学生は英語を使用し、UNG の学生は翻訳者としてインドネシア語で話し、英語が理解できない招待客が理解できるように支援しました。

発表の終了後、司会は招待されたゲストに対してロンボンゴグループに質問、提案、コメントを促しました。スワワセンターの地区長からいくつかの提案が出されました。初めに、私達のグループに感謝していること、次に、ロンボンゴにはゴミ問題以外にも重要な問題があるので、ゴミ問題だけに集中しすぎないようにという意見が述べられました。また、私達の存在がコミュニティの新しい仕事を創出する事を望んでいるとコメントされました。

その後、地区長からの質問やアドバイスに答えました。私達は、地区長からの意見に感謝することから始めました。それから地区長に、ロンボンゴ村の問題は地域社会と政府の間のコミュニケーションの問題であると説明しました。そのために、私たちがやるべきことは、将来のより良いロンボクの発展のためにすべての関係者の間で良いコミュニケーションの構築を始めることでした。ゴミを収集する活動は、コミュニティ間のコミュニケーションへの影響を示す例の一つでした。私達はそれをロンボンゴ・カクメイと呼びました。私達の意見は、ロンボンゴの所有者は、地方政府自身とロンボンゴのコミュニティです。そうすれば、もっと気にする必要があるのは、周囲のコミュニティの市民です。

地区長の質問以外に、UNG とボネ・ボランゴの両方がすでに関与している協力の継続に関して、他の質問も出ました。質問者は、一緒に作られたプロジェクトプログラムをフォローアップする事で、何か生産されるものがあるのか、又は結果が地方政府に与えられるかについて尋ねました。

村の役人が「このプログラムで、日本人はロンボンゴの村で実施される最新の技術革新をもたらす事ができる」との意見を述べました。これに対して日本の学生の一人は、「日本の学生達は日本から最新の技術を持ち込むことができるエンジニアではない」と述べました。続けて、「しかし、あまり深く考えないでください。今日、解決すべき小さな問題がたくさんあり、インドネシア、特にゴロンタロではそれらは最優先事項でなければなりません。このため、最初に小さな問題に焦点を合わせる必要があります。」さらに、彼は「技術的な問題は価格が高いので難しい」と言いました。

すべてが終了した後、日本の学生と榊原教授はボネ・ボランゴ政府からお土産を受け取り、ランチセッションを続けてフォトセッションで終了しました。プログラムの完了後、次のグループの発表に進みました。

オレレでの休暇

ゴロンタロでの日本人学生の最終日は、オレレでのダイビングでした。ダイビングは日本の学生のみです。私達は、UNG-愛媛の地域社会共同サービス活動のすべての参加者と夕食する時間を待っていました。

今日の夕食は、元の UNG 参加者の家で行われました。誰もが話し、別れを悲しんでいました。この夜は、すべての参加者が一緒に過ごせる最後の夜でした。悲しみの雰囲気に深く溶け込んだ学生もいました。それから私達はギフトを交換して一緒の時間を思い出しました。

グループ活動中の体験談を語った人もいれば、お互いの人生について語った人もいました。日本人の友人達は明日帰国の準備をするためにすぐに宿に戻らなければならないので、その夜はとても短く感じました。

図 5.23　プログラム終了後のひとこま（すっかり打ち解けたグループメンバーたち）

第 6 部

フタダア村における私達のストーリー

ルピアになったゴミの銀行

図 6.1　日本とインドネシアの学生の初対面

日本とインドネシアの学生達の初対面では、お互いに名前を紹介することから交流を始めました。最初は違和感がありましたが、しばらくするとみんなジョークも言うようになりました。これから 2 週間の期間に行う活動についての指示を榊原先生より受けました。その後、私達は明日観光するよう予定を立てました。

このツアーの目的は、フタダアグループのメンバー間の調和を図ることでした。インドネシアの学生は、ゴロンタロでよく知られている 2 つの観光名所を日本の学生に紹介しました。それは、宗教観光村のボンゴとドゥランガビーチでした。日本の学生は、紹介された観光名所にとても満足しているようでした。目的地を決めた後、ゲストハウスからツアーへの出発は明日の午後 2 時になりました。時間は午後 5 時になって、KKN Collaborative の参加者全員と写真撮影を行なった後、日本の学生は休息の許可を求めました。

翌日、インドネシアの学生は午後ちょうど 2 時にゲストハウスに集まり、日本の学生は昨日とは少し違った表情で待っていました。西原あかりさんはゴロンタロの伝統的なモチーフのヒジャーブを着用して、秋山咲絵さんと岩本妃来羅さんは一般的なヒジャーブを着用していました。 西原あかりが着用していたヒジャーブは 1 年前に KKN Collaborative の参加者から贈られたものでした。日本の学生はヒジャーブを使用してみたかったのですが、着用するのが難しそうだったので、インドネシアの学生・オリビアさんが着用を手伝ってあげました。

図 6.2　ヒジャブを着用している日本の学生

予定していた観光スポットに行こうとすると、いくつかの問題が発生したため、旅行先を変更する必要がありました。最終的に、ボトゥバラニのジンベイザメのアトラクションを訪れることにしました。

この観光名所への移動は約 45 分かかりました。インドネシアの学生の一人、ヤヤットさんが所有する車で出発しました。ヤヤットはかなり上手に車を運転したので、私達は移動中安心できました。言うまでもなく、観光地への旅の間、私達はみんな一緒に歌ったり、笑ったりしていました。私達が歌ったほとんどの歌は、日本の有名な女の子グループである AKB48 の楽曲でした。音楽は、文化、言語と習慣が異なる 2 つの学生グループを結び付けることができる世界共通語であるとみんなが思っていましたが、その事が確かに証明されました。私達の間の距離は段々近づき、お互いの違和感はもうなくなりました。

45 分間の移動後、私達は目的地に到着しました。日本の学生はすぐに携帯使って、到着した場所の写真を撮影しました。インドネシアの学生もその場所の撮影に参加しました。

写真を撮ることに満足した後、インドネシアの学生は、すぐに日本の学生チームを漁師の所有する船がある倉庫に案内しました。私たちがジンベイザメを直接見ることができるように、海の真ん中へ行くためのボートを借りました。オリビアさんは、インドネシアの学生の代表として、船主としばらく交渉をしました。インドネシアの学生によると、船主が提供する価格が高くて、私達にはその代価を支払うための十分なお金がなかったため、値段の交渉をしなくてはいけませんでした。

やっと、価格契約が成立し、ボートの所有者は、私たちが提示した価格に同意しました。私たちはすぐに船に乗りました。最初、私達がボートに乗ろうとした時、天気はあまりよくなく、風が少し強く吹いていたので、やや心配しました。しかし、ボー

トの所有者は、時間がもう夕方だから、これは普通のことだと私たちを安心させてくれました。

私達は笑いと喜びの叫び声の中、海岸を離れ、ジンベイザメが隠れているところまでボートで行きました。漁師がその点に達すると、すぐにボートをノックしました。これはジンベイザメを地表に呼ぶためにすることのようでした。

しかし、5 分間そこで待っても、ジンベイザメは現れませんでした。私たちのボートだけでなく、他のボートの観光客もボートをノックしましたが、ジンベイザメは現れませんでした。10 分間待っても全く現れませんでした。私たちは日本人学生を失望させたくなかったので、とても心配しました。しかし、私達はまだ希望を失ってはいませんでした。日本の学生はすぐに「ジンバエ」という言葉を叫びました。これは日本語で「サメ」を意味します。インドネシアの生徒たちはその言葉を後から、叫び続けました。そしてついにジンベイザメが 1 匹現れて、私たち全員は喜びました。

図 6.3　ジンベイザメポイントに行くボートに乗っている日本とインドネシアの学生

ジンベイザメは 1 匹しか現れませんでしたが、私たちはとても喜んでジンベイザメに餌を与えました。餌は小さな魚で、ゴロンタロの人々から「ニケ」と呼ばれています。ここでも、カメラで瞬間を捉えるアクションは常に必須でした。

ジンベイザメと遊ぶことに満足した後、ジンベイザメに手を振って海岸に戻り、日本語で「さようなら」を意味する「じゃね」を叫びました。それは、日本の学生から教えてもらった日本語です。

私達は、続いてオタナハ要塞と呼ばれる観光名所を訪問しました。この要塞では、私達よりも早く着いていた他の 3 つのグループに会いました。私達は一緒に楽しんだ全ての思い出を写真として保存しました。そこでは、インドネシアの学生が互いに競い合い、要塞の歴史と物語を説明しました。また、日本の学生は自分達の話を注意深く熱心に聞いていました。

図 6.4　オタナハ要塞の自然パノラマを背景に集合写真を撮った日本とインドネシアの学生

3 つの拠点を巡って疲れたので、私達は目の前に広がる自然の景色を楽しみながらしばらく休憩しました。オタナハ要塞の景色に驚いたのは、日本の学生だけではありませんでした。オタナハ要塞を頻繁に訪れているインドネシアの学生でさえ、オタナハ要塞の景色に引き付けられていました。

図 6.5　オタナハ要塞で集合写真を撮った日本とインドネシアの学生

オタナハ要塞で写真を撮ることに満足したので、私たちと他のグループは伝統的な市場への旅を続けました。日本の学生は、ゴロンタロの伝統的な市場の状況を間近で見たいと思っていました。

市場に到着すると、インドネシアの学生はすぐに日本人の学生に同行して市場を散策しました。彼らは、ゴロンタロの伝統的な市場で広く販売されている食べ物に関する新しい情報をたくさん得ました。そこで日本の学生が売り手からバナナを買いました。フタダアグループの福永晃さんは、インドネシアで売られているバナナはとても美味しいと言いました。それだけでなく、インドネシアの学生も日本人の学生に「ラ

ングサット」というフルーツを紹介しました。少し酸っぱい感じもしましたが、彼らはそれも気に入りました。

最後のアジェンダは、国立ゴロンタロ州大学の近くのレストランで夕食をとることでした。日本とインドネシアの学生はジョークを交えて笑いの絶えない楽しい時間を過ごしました。また、両国の学生の言語交換も頻繁に行われました。

夕食の後、ベントールに乗ってゲストハウスに戻りました。このベントールに乗るのは初めてだったので、日本の学生はその乗り物に興味深々でした。インドネシアの大学生も、同行して後ろの席に座って、ベントールのドライバーを目的地に誘導しました。

目的地に到着すると、チアさんというインドネシアの学生にとって少し恥ずかしいハプニングがありました。チアさんと古谷華穂さんがゲストハウスのゲートに入ったとき、その時は暗かったので、チアさんはゲートの近くに溝があることが分からず側溝に落ちました。幸いなことに、溝の水は浅く、足首までの水位置だったので、チアさんの足はあまり濡れませんでした。チアさんが倒れるのを見た途端、すべての学生がすぐに彼女を助けようとしました。この事から、私達は一体感が非常に強いと感じました。お互いを知ってまだたったの 1 日でしたが、すべての学生の心の中にはお互いを守る感覚が育っていました。

フタダア村のコミュニティと初めて出会う

地域社会共同サービス活動は、2018 年 8 月 27 日土曜日に開催されました。UNG の第 1 副総長、UNG LPPM のすべての従業員および講師によって私たちが活動を開始することが正式に発表されました。各村に出発する前に、私達は活動を行う際、自分達の大学名と個人の尊厳を維持するように指示がありました。 そして、UNG の学長の建物でグループ写真を撮りました。

図 6.6　地域社会共同サービス活動の参加者全員の集合写真

私達が最初に訪問した場所は、テラガ・ジャヤ地区事務所でした。私達が実地するフタダア村での地域社会共同サービス活動の許可申請をするために地区長を尋ねました。その後、フタダア村長に許可を求めるため、フタダア村事務所に向かいました。

図 6.7　テラガ・ジャヤ地区事務所を訪問するフタダアグループ

フタダア村政府は KKN Collaborative の学生の訪問を快く受け入れ、温かく歓迎してくださいました。また、フタダア村政府は、この地域社会共同サービス活動を支援し、この活動を円滑に実地するため、必要なすべて物を提供する準備ができていると述べました。

図 6.8　フタダア村長との面談

村政府による開会の挨拶の後、私達はリンボト湖に着くまで村を歩き回りました。フタダア村の問題点を探しながら現地調査を行いました。最初に行った観察にそれほど時間がかかりませんでしたが、私達が村を歩き回ると、村の周りに問題が見つかりました。この問題は重要な問題であり、みんなで議論して解決することができると考えました

図 6.9　フタダア村の周辺を探索している様子

私達は議論を行うため、午前 10 時ごろに村の事務所に戻りました。そこでフタダア村に存在する問題を特定するために議論を行いました。昼食時に議論は終了しました。

図 6.10　フタダア村の図書館の外観

昼食後、私達は住民の家を訪問してインタビューを行い、観察を続けました。 チームを 3 つのグループに分けて、作業時間を効率化することにしました。 1 つのグループに、日本人の学生とインドネシア人の学生が入るように構成しました。フタダア村の予備情報によると、フタダア村は Huyula（フユラ）村落、Dusun Lestari （ドゥスン・レスタリ）村落と Lotus Village(ロータス・ビレッジ)村落で構成されることから、仕事の分担を 3 つのグループに分けました。フユラ村落には 266 世帯、ドゥスン・レスタリ村落には 245 世帯とロータス・ビレッジには 208 世帯の住民がいました。私たちは各村の世帯数の 20%ほどをインタビューすることにしました。

インタビューの資料は教育に関するものでした。最初の調後に行なった議論の結果より、教育問題をグループが検討する問題としました。実際に、最初の調査後の議論で、2 つの異なる意見が出ました。UNG の学生は、フタダア村の環境問題を村の最も重要な問題として取り上げる一方で、日本の学生は、教育問題が最も重要であると意見を述べました。

激しい議論の末に、UNG の学生は教育問題を提起することに同意しました。私達が作成した質問は、最終学歴、教育を追求する過程での困難な点、1 ヶ月にかかる教育費、毎月の収入、図書館への訪問の頻度、そして図書館の認知度、としました。

コミュニティとのインタビューの終了後に、各グループが行なったインタビューの結果について議論を行うため、全員村の事務所に戻りました。

図 6.11　村のコミュニティをインタビューしているフタダアグループ

非常に残念なことは、インタビューの結果がすべての世帯ではなかったという事実でした。 私達が訪れるほとんどの世帯は、どんなことがあっても、扉を開けていませんでした。一般的にゴロンタロの人々、特にフタダアのコミュニティは正午に昼寝をする習慣があります。したがって、インタビューできる家はわずかで、取得したデータの数は実際には最小限な数でした。

私達の現在の状態について、村の事務所役のフタダアの村長と相談しました。村長が第 2 村落と第 3 村落の住民を各村の 1 か所に集めてインタビューできるよう、親切に手配をしてくれました。村長によると、第 2 村落と第 3 村落のコミュニティの大半を占める職業は漁師であるため、コミュニティに簡単にインタビューできるというのです。 この点は、第 1 村落の人口の大部分が従業員であることと大きく異なっていました。そのため、私達は第 1 村落については、住民の家を訪問することにしまし

た。その後、私達は一般公開される質問について議論しました。その日のフタダア村での地域社会共同サービス活動の活動が終了し、LPPM に戻ることにしました。

榊原先生とフタダア村のコミュニティとの議論を聞く

フタダア村での活動の２日目は榊原教授と一緒にフタダア村を訪問した特別な日でした。私達は、前日に計画した第２村落と第３村落の住民を集めてインタビューを実行することにしました。集会場所はコミュニティ自体によって決定され、村長が支援してくださいました。

村の事務所に到着した後、私達は榊原教授に、村のどこかで第２と第３村落のコミュニティとのインタビューを行う事を伝えました。しかし、榊原教授から、私達が作成したアンケートでは村の問題を評価できないと指摘されました。

今朝のフタダア村への移動中からずっと、インタビューするアンケート項目について相談してきました。しかし、項目を変更する必要がありました。最終的に、私達は、評価可能な問題を見つけるために、榊原教授と一緒に村を再び回ることに決めました。私達が発見した主な問題は教育に関するものであり、図書館がフタダア村で十分に活用されていないということを榊原教授に伝えると、すぐに村の図書館の状態を見たいと言われました。

その後、村の事務所から図書館まで歩きました。図書館への道で、榊原教授はフタダア村の保健所を見て、「それは病院ですか？」と尋ねました。私達が、これはこの村の保健所だと答えると、先生は保健所の状況と設備の可用性を見るために立ち寄りました。私達もその施設を覗いてみました。一般に他の保健所と比較して、設備の可用性は十分でした。その保健所では、医師が英語で分かりやすく施設全体を説明してくださいました。

図 6.12　村の保健所を訪問しているフタダアグループと榊原先生

榊原教授はその保健所の状態を見た後、榊原教授の気が変わって、図書館に行かず、住民の集合場所に直接行くことになりました。

その場所に向かう途中、榊原教授は家の前に座っている市民を見る度、いつも訪問して、住民の家に入って質問をしたり、家の中の状況を確認したりすることもありました。コミュニティはそれを嫌がっていなかったのでほっとしました。逆に、住民は榊原教授のようなゲストを迎えることを喜んでいました。

図 6.13　モスクへの行く途中で出会った住民にインタビューしているフタダアグループ

やっと、私達は第 2 村落の住民が集会所として使用しているモスクに到着しました。モスクには約 70 人が集まっていました。自己紹介の後、榊原教授は「どうやって、ここに家を建てましたか？」 「かつては湖でしたか？」と質問し始めました。その質問に、住民は、「第 2 村落の家屋はその家屋がひどく破損した洪水の被害者に対する政府の補助金の一部でできている」と回答しました。

図 6.14　モスクに集合しているフタダア村・村落第２の住民

議論中、榊原教授は、住民がインドネシア語を使用しているにもかかわらず、直接話をすることを希望しました。しかし、住民は話すことを恐れているようでした。 彼と直接話をした勇敢な女性は 2 人しかいませんでした。次に、榊原教授は村のゴミ問題について尋ねました。住民は、この村でゴミ問題が主な問題であると答えました。「本当に問題と思っているのなら、どうして掃除をしないのですか？」と再び尋ねると、「ゴミを燃やす方法で掃除している」と答えました。榊原教授がこの答えに笑って、「本当ですか？私は信じられないですが。本当に掃除しているなら、なぜまだゴミだらけになっているのですか？掃除してください。」とモスクの周辺にあるゴミを指して言いました。また、住民は「ゴミを回収して、最終的にゴミの処理場まで運んでくれる人達はもうここにはいない」と屁理屈を言いました。榊原教授は再び「なぜ自分でやらないの？」と尋ねましたが、住民はこの質問に答えることができず、ただ黙っていました。

図 6.15　フォーラムで自分の意見を話している女性

榊原教授は、「おそらく 10 年後にはリンボト湖はなくなるかもしれません」と強調しました。次に、住民に 2 つの選択肢を与えました。最初の選択肢は、違う場所に移動して別の仕事を探すこと、2 つ目はここ残って、リンボト湖の存在を保存することでした。すべての住民は、「まだこの村に住みたい」と言いました。みんな、リンボト湖の世話をしたかったからです。その答えを聞いた後、榊原教授はゴロンタロ政府がリンボト湖にジオパークを建設することを住民に知らせました。

図 6.16　榊原先生の説明を注意深く聞いている村の人々

コミュニティが榊原教授の話したジオパークの話に混乱したように見えたので、リンボト湖のジオパークプロジェクトについて住民に説明しました。コミュニティはその考えに興味を持っているようでした。リンボト湖にジオパークが建設できるよう支援する最初のステップは、この村の環境を守ることだと言いました。会議の終わりに、私達はフタダアスゴイグループを設立しました。「すごい」という言葉は日本語から引用しました。このグループは、第 2 村落の清潔さを守るために作られました。

第 2 村落で議論が終了後に、私達は第 3 村落に出発しました。途中で、榊原教授は別の村に行くことになったので、第 3 村落へ同行できず、私達のグループだけが第 3 村落で議論を行いました。

第 3 村落で私達を待っていた住民は 10-15 人でした。第 3 村落のコミュニティには、第 2 村落で使用した質問を同様に尋ねましたが、コミュニティの関心はそれほど高くありませんでした。それでも、私達は環境を保護しなかった場合の影響や「ジオパーク」プロジェクトについて引き続き説明しました。お祈りをする時間が来たことに気づいたので、私達はコミュニティとの議論を終了しました。お別れを言って皆で写真撮影の後、休憩と昼食のために村の事務所に戻りました。

昼食後、フタダア村に提供する計画とプログラムについて議論しました。 日本の学生は、自分達が住んでいる松山市のようにゴミを分別するアイデアを提供しました。この議論は午後 3 時に終わり、LPPM に戻りました。

LPPM に着いたら、議論をまた続けました。燃えるゴミは紙と食べ残した物で、燃えないゴミはプラスチック、金属、電池、ガラス、電子機器に分別することにしました。インドネシアの学生が「Mas Joko」と呼ぶ人のように、リサイクルのできる人には紙を売る事を提案しました。日本人学生はその提案に賛成しました。

ゴミ分別のプロセスを促進するために、ゴミ処分のスケジュールを立てるよう、計画しました。たとえば、月曜日に、紙とプラスチックのゴミを処分します。同様に、他の日には、スケジュールに基づいて処分するゴミの種類を調整します。さらに、処分時間も決定しました。たとえば午前 7 時から午後 3 時までゴミの処分をするように決定して、午後 4 時から 5 時までにごみの分別・販売行うというふうにしました。

フタダア村のティーンエイジャーとの議論

今日も前日と同様の活動を実行しました。フタダア村の若者とティーンエイジャー向けの議論コンセプト（略称してレマムダと名付けました）について活動するため、フタダア村に行きました。今日は李准教授が同行してくださいました。

議論が行われる直前に、このティーンエイジャーと議論する問題についてグループと打ち合わせをしました。その後、私たちはティーンエイジャー1 名の所に行って議論を行いました。議論のテーマは、フタダア村周辺のゴミをきれいにする計画でした。面白い事に、議論したティーンエイジャーは村の人々の特徴をよく知っていて、「フ

タダア村の住民は頑固だ」と言いました。また、「私達のプログラムが成功したとしても、住民の行動は 2〜3 週間しか続かないため、人々はゴミのポイ捨ての習慣に戻ります」とも言われました。

図 6.17　フタダア村の若者との議論

フタダア村の若者達は、日本のゴミ管理システムに興味を持っており、日本の学生に日本のゴミ処分の文化について質問してきました。日本の学生は「日本では、誰かがゴミのポイ捨てをすると、その人は愚かで、教育がなく、恥ずかしい行為だと思われる」と答えました。また、日本では、学校でも家庭でも、教師と保護者の両方が環境を保護することの重要性をティーンエイジャーに常に教育していると言いました。

日本では、お祭りが行われた会場がゴミで汚れる事はよくあります。お祭りの会場を清掃するボランティアはいますが、ごみの存在についてコミュニティが高い意識を持っているならば、ボランティアが祭りのゴミを片付けているのを見たら恥ずかしく思います。また、身の回りにあるゴミは自分たちで片づけるものだと日本人は考えているので、きれいにしています。したがって、日本社会全体が環境を清潔に保つ事で環境を保護しようとする事は驚く事ではありません。しかし、日本の文化とは異なり、フタダアでは、誰かが適切な場所にゴミを捨てるように頼むと、それを指示された人は気分を害するので、人に注意することを怖っていやがります。

図 6.18　フタダア村の若者との議論

その後、フタダアの若者やティーンエイジャーに、ゴミを分別する事でお金を稼ぐことができると伝えました。ゴミを分別する文化が今から熟知されると、その行為がきれいな環境をもたらすだけでなく、収入源にもなります。環境をきれいにし、ゴミの分別を行うことによって得たお金を報酬として受け取ることができます。コミュニティ全体がゴミを無くす事ができれば、フタダア村はきれいな場所になり、健康的な環境になります。

図 6.19　フタダダアグループ、李先生、村の若者との集合写真

若者とティーンエイジャーと時間をかけて議論した後、グループメンバーを 3 つの小グループに分けて、住民とのインタビューを行いました。インタビューでは、毎日出てくるゴミの量について質問すると、M サイズのプラスチック袋に入る量のゴミが収集されるという答えが返ってきました。

図 6.20　フタダアグループよりインタビューされた住民

住民とのインタビューの後、昼食のために村の事務所に戻りました。その後、私達は発見した問題について再び議論し始めました。議論の結果は、住民にゴミ袋を提供し、1 日あたりのゴミの量を測定することにより、ゴミを管理する方法を見つけることでした。収集されたゴミは販売され、お金になります。

`議論の終了後、私達はゴミ処理会社に行って、ゴミの処理プロセスとプラスチックゴミの価格を尋ねる観察活動を続けました。

図 6.21　ゴミ管理会社に訪問したフタダアグループ

ごみ袋の無料配布

プログラムの 4 日目は、ゴミ袋を無料で配る日でした。この計画は、コミュニティのゴミの収集を促進するために実施されました。その後、1 日に発生するゴミの量を測定する活動を行いました。いつものように、時間をより効率化するために、グループメンバーを 3 つの小グループに分けました。第 2 村落は西原あかりさんとオリビアさん、第 3 村落はチアさんと秋山咲絵さん、第 1 村落はヤヤットさん、岩本妃来羅さんとフィトリさん（ティーチングアシスタントを担当しています）がそれぞれ担当しました。私達はゴミ袋を配るため、住民の家を一軒ずつ訪問しました。

図 6.22　コミュニティにビニール袋を配布している様子

各小グループは、訪問の目的と目標はこのゴミ袋の配布に関係している事を住民に説明しました。配布された袋には、プラスチックゴミだけを入れるように説明しました。コミュニティは私達を歓迎してくれました。ゴミ袋を配布した後、私達は村の事務所に戻りました。そこで、私たちは月曜日に行う、県政府に発表に向けて準備しました。

コミュニティからビニールの袋を回収する

今日は、前日と同様に、私達は村に到着した後、グループごとに分かれ、昨日配布したゴミ袋を回収しました。多くのゴミが収集されていました。ゴミを集めて帰る途中で、第 2 村落のグループはユニフォームを着用している警官に会いました。 警官は私達が行っている事を尋ねてきたので、友人は私達の活動について警官に説明しました。すると、警官は親切に新鮮なココナッツを提供してくれました。そのオファーは、特に西原あかりさんにとって興味をそそるものでした。なぜなら、西原あかりさんはココナッツのフルーツからココナッツ水を直接飲んだことがなかったからです。私達は警官に合流して、暑い天気の中、新鮮なココナッツ水を美味しくいただきました。警官はグループ 1 と 3 も一緒にココナッツ水を飲もうと招待してくれました。

図 6.23　木から直接取った新鮮なココナッツをくれた警官とフタダアグループ

日本の学生は木から摘み取ったばかりのフルーツからココナッツ水を直接飲むのが初めての経験だったので、ココナッツを本当に楽しんでいました。また、若いココナッツ水はとても新鮮だと言いました。それを飲み終えた後、私達は警官に別れを告

げ、感謝を伝えました。その後、収集したゴミの重量を測定するために村の若者組織の場所へ行きました。

収集したゴミが袋一杯になっている状態から、そのゴミは 1 日のうちに発生した分ではなく、何日間分蓄積されたのではないかと考えました。最も多いゴミは、スナックのパッケージ類のプラスチックゴミでした。また、ペットボトルとグラスが別になるようにゴミを分別しました。

ゴミの分別後に、重量を計りました。全ての物を重量した後、村のティーンエイジャーの手伝いで、一番近い場所にある埋め立て地にゴミの処分を行いました。次に、ごみ会社の測定に基づいて取得される金額を計算しました。

図 6.25　ゴミの重量を計算しているフタダアグループ

結果が得られた後、再度議論しました。議論の結果に基づいて、今日得られたゴミは 1 日で発生した量ではないことを検証するため、サンプルの最小量を 1 日あたりのゴミの平均発生量としました。

ゴミを集めて、この量のゴミを売られた場合、得られる金額を予測した後、今日の仕事は終了しました。そして、私達は村の事務所に戻りました。村の事務所では、県政府への発表の準備を再開しました。しかし、私達は県政府への発表のために準備するだけではなく、フタダア村のコミュニティへの発表のためにも準備しました。スケジュール通り、明日、一般市民とフタダア村政府への発表を行うことを村長に報告すると、村長は積極的に対応してくれました。

、

フタダアのコミュニティの前でプログラムの発表を行う

プログラムの 6 日目、2018 年 9 月 3 日は発表を準備していました。それに加えて、同じ日に、私達はコミュニティのための食事の準備と村の役人が一般市民に配布する手紙の準備を手伝ったのでとても忙しかったです。発表は、フタダア村のコーヒーショップで午後 3 時に開催午後 2 時 30 分に、私たちは皆でコーヒーショップに向かいました。コーヒーショップと村の事務所の間の距離はそれほど遠くありませんでした。

図 6.26　発表する部屋を準備しているフタダアグループ

コーヒーショップに到着すると、村の役人の助けを借りて発表する場所を準備しました。当時、フタダア村の電力供給に問題が発生したので、発表が延長になるなどの影響がありました。

午後 4 時に電力が利用可能になり、村長の開会の挨拶でイベントを開始しました。発表では、日本語、英語、インドネシア語の 3 つの言語で使用しました。秋山咲絵さんと岩本妃来羅さんは日本語で、西原あかりさんは英語で、UNG の学生はインドネシア語で挨拶をしました。私達の発表終了後に、質問や私達が提供したプログラムについての意見をするようコミュニティにお願いしました。

図 6.27　フタダアの住民に発表しているフタダアグループ

発表では、コミュニティに綺麗で健康に良い環境を維持することの重要性について協調する事から始めました。また、私達は、清潔さの状況の概要と、周囲の環境の清潔さに関する日本人の考え方を紹介しました。その後、村のコミュニティに提供したいプログラムを説明しました。具体的には、このプログラムはゴミ収集プログラムであり、日常的にゴミの種類によってスケジュールする方法を用いて、ゴミを収集しま

す。その後、コミュニティのゴミが収集され、月に 2 回販売されます。そして、稼いだお金は村のコミュニティのために使用できると提案しました。

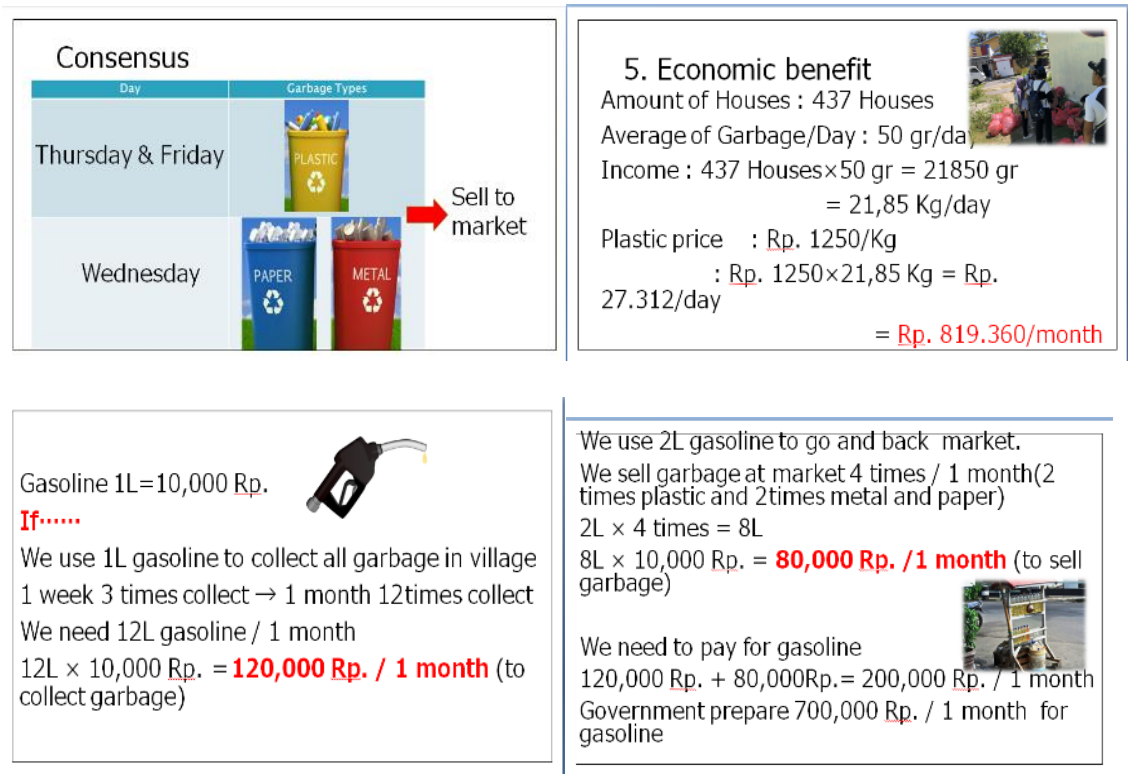


図 6.28　フタダアグループが村の住民に提供したコンセプト

私達が提供したプログラムへの同意の声を除き、誰も質問しませんでした。実際に、コミュニティはこの社会サービスプログラムの延長を望んでいました。会の終わりにコミュニティと一緒にグループ写真を撮り、発表は午後 5 時半頃に終わりました。。

図 6.29　フタダア村のコミュニティとの集合写真

フタダア村の病気のデータを収集する

プログラムの 7 日目に、私達は李准教授と一緒にフタダア村に行きました。今日のアジェンダは金曜日に行う政府への発表について、パワーポイントを準備する事でした。全体のアジェンダは発表の準備を行う事、保健所のフタダア住民の疾患症例に関するデータの開示を要求する事と議論を行う事でした。

午前 9 時に、チアさんと秋山咲絵さんは診療所に行き、データの開示を要求しました。データを取得した後、保健所で働いている医師はチアさんとサエさんを皮膚疾患の患者の検査に同行することを提案してくれました。医師はチアさんと秋山咲絵さんを村の事務所に送り、李准教授と少し話をしました。

図 6.30　フタダア保健所で患者の状態について説明している保健所の医師

得られたデータの結果によると、フタダア村の住民に主に広がっている病気は、ISPA と皮膚疾患でした。それに基づいて、病気のデータをゴミ問題と関連付けるよう議論しました。ゴミ問題には、スナックの包装やビニール袋のようなプラスチックゴミとして販売できないゴミについての解決策が含まれました。議論の結果より、私達が提案した解決策は、ゴミをガソリンにすることでした。私達の議論を聞いた李准教授は、政府に提案をし、この提案がどの分野の条件に適しているかを政府に選択させようと私たちにアドバイスをくださいました。

ゲストハウスに戻る前に、発表の資料であるパワーポイントの作成を続けました。

上手くまとまらないグループでの議論

今日、私達は一日中、より実用的で持続可能なプログラムを設計する方法を見つけるための発表と議論の資料を作成することだけに焦点を当てました。UNG の学生は、

住民と村長の声明のようにプログラムを実行する事を提案しました。したがって、このプログラムの計画を持続可能なものにするには、監督者が必要でした。それとは別に、プログラムを行う際、違反があった場合には何らかの罰則がなければならないと考えました。地方政府によると、罰は米などの食材の一時的に停止する形をとることができるようでした。

図 6.31　解決策の決定に向けてディスカッションを行うフタダアグループ

住民と村長からの意見に基づいて、次のような計画を用いてこのプログラムを持続可能にするというアイデアを得ました。

1. 村の組織、つまり「dasa wisma（ダサ・ウィスマ）」を割り当てて、週に 2 回、住民の家を管理します。

2. 各ダサ・ウィスマの代表者が 10〜12 の家を管理します。

3. 確認時間が来たときに住民に通知せずに監督が行われます。

4. 汚れた家がある場合、レッドカードが与えられます。

5. 月に 5 枚のレッドカードがある場合、制裁が与えられます。

注：フタダア村には 36 のダサ・ウィスマがあります

日本の学生も UNG 学生のアイデアに同意しました。今日の活動はここで終了になり、この地域社会共同サービス活動の実施にたくさんの援助してくださった村長と村の役人にお礼とお別れを言わなければなりませんでした。

今日は、フタダア村での活動の最終日でした。榊原教授と一緒に LPPM に集まりました。榊原教授は、私達の発表について変更の必要があるかどうかを決定するため、発表を評価してくださいました。私達の準備した発表を榊原教授に見せると、教授はこの計画に同意しませんでした。榊原教授は「これは奴隷の方法だ」とコメントしました。また、人間に人間の意味を与える必要があると言いました。榊原教授は、罰や

報酬のためコミュニティが従うのではなく、コミュニティから自己認識が現れる事を期待していました。 また、ジャンクセールで稼いだお金は、環境を保護している場合の利点の 1 つにすぎないと付け加えました。主な目標は、コミュニティでの自己認識と、自分たちの環境を気遣う感覚をどのように高めるかです。榊原教授からいくつかのアドバイスを得た後、私達は方法を変更しました。

午後 5 時になり、学生は帰りました。

私たちのアイデアが承認された日

プログラムの 9 日目に、発表資料の作成を続け、変更された計画に取り組みました。私達はまだ罰のアイデアを計画に入れましたが、罰としてレッドカードを受け取った人の規制には環境に関する情報が与えられる事に変更しました。この罰の時間は月に 3 回だけすることにしました。榊原教授も私達の変更した計画に同意しました。また、問題を確定する方法について修正を行いました。

日本と UNG の学生は、問題の特定と目的の理解について考え方が違うため、少々困りました。しかし、ようやく議論はスムーズに進み、ゲストハウスで夜 12 時まで発表資料の改善を行いました。

UNG の記念日とロンボンゴの散策

2018 年 9 月 1 日は、私達全員は UNG の 55 周年を祝う行事に参加していたので、村に行きませんでした。日本の大学生は浴衣を着用していました。浴衣は日本の伝統的な衣装で、夏に使用されます。一方、インドネシアの学生は、女性はケバヤを、男性はケラワンを着用しました。どちらもインドネシアの伝統的な衣装です。

私たちは UNG 学長による UNG の記念日の開会式に出席するために、きちんと 7:00 に UNG の学長のビルに集まりました。日本とインドネシアの学生は、お互いの伝統的な衣装を称賛し、一緒に写真を撮りました。オープニングが始まると、私達全員が庭に集まり、日本の学生が 2 つのダンスを行うまで、一連のイベントを行いました。イベントはとても盛り上がりました。日本の大学生はすぐに有名人のようになって、一緒に写真を撮りたいという要望がたくさんありました。また、グリーンウォークに参加して、冗談を言ったり、笑ったり、歌ったりしていたので、少し疲れましたがとても楽しかったです。その後、学長のビルで昼食をとりました。

図 6.32　日本の伝統的な衣装（浴衣）を着て UNG の記念日に参加する学生たち

日本の学生はゲストハウスに戻りました。また、午後 1 時に再びゲストハウスに集合することにしました。今日、西ペタディオとロンボンゴのグループは観察を続ける必要があるため、２つのグループを支援するために、それぞれ 2 つのグループに分かれました。イロチデアチームは西ペタディオチームに、フタダアチームはロンボンゴチームに同行する事にしました。

私達は正午に 2 時頃にゲストハウスからロンボンゴに出発しました。ロンボンゴに到着後、ロンボンゴにある川に直行しました。皆ユニークなポーズで写真を撮りました。川で遊ぶ事に満足した後、私達は食事をする場所を探しました。インドネシアの学生は揚げバナナを注文しました。日本の学生はそれにとても興味を持っていたのでとても喜んでいました。満腹になった後、ヤヤットさん、レアリフさんは泳ぎに行きました。時間がたっている事にみんな気づかず、時間をチェックすると 5 時半になっていることがわかりました。みんな急いで出発し、ピノスレストランで夕食をとりました。　食べ終わった時、ゲストハウスに戻りました。

図 6.33　ロンボンゴ温泉で楽しい時間を過ごしているフタダアとロンボンゴグループ

プログラム発表の日

やっと、みんなが待ち望んでいた日が来ました。今日、私達は幸せと緊張、そして悲しみを同時に感じていました。「悲しみ」は、このプログラムが間もなく終了し、すぐにメンバーたちと別れる事になるからでした。次に「緊張」は政府の前で発表をしなければならないためでした。そして、「幸せ」は、もう発表資料を準備する必要がないためでした。

私達は朝の 8 時にゲストハウスに集合しました。日本の学生が朝食をとっている間、インドネシア人の学生は発表のために練習していました。オリビアさんと秋山咲絵さんは、この発表の練習に非常に真剣に取り組んでいました。すべてのチームは、ボネ・ボランゴの県の事務所に向かいました。最初に発表を行ったチームは、ロンボンゴチームでした。ロンボゴチームは非常によい発表をし、無事に終了しました。

ロンボンゴチームの発表後、昼食のために休憩を取り、祈りました。男性が礼拝を終えるのを待っている間、日本の学生はスタッフより「ヘナ・アート」（肌に優しいインクを使用して手肌にペイントするアート）を試し、出来上がったヘナ・アート を見てとても喜んでいました。

全員が集まった後、ゴロンタロ県庁に行くことにしました。ゴロンタロ県庁に向かう途中で、写真を撮るためにセンターポイントに立ち寄りました。 写真を十分に撮った後、ゴロンタロ州政府の公邸に到着し、すぐに発表の場所を設営設定しました。

次に発表するチームは、フタダアチームでした。私達は、西原あかりさんとヤヤットさん、岩本妃来羅さんとティアさん、秋山咲絵さんとオリビアさんのペアに分かれて、自分の発表箇所を練習しました。 日本の学生は英語で話し、インドネシアの学生はそれをインドネシア語に翻訳しました。

フタダアチームの順番がやってきました。インドネシアの学生にとっては、初めての経験だったため、とても緊張していました。私達は緊張しながらも、最善の発表をするよう心の準備をしていました。私達は聴衆の前で緊張を隠すように心がけました。

発表は終了し、私達はとてもほっとしました。次の発表は西ペンタディオとイロチデアのチームの発表でした。すべてのグループが自分達の発表が最高になるよう、努力しました。最後に、最高の発表をしたグループが発表されました。榊原教授は上位 2 チームに報酬を与えると約束していたので、すべてのグループはドキドキしながら、競争に勝つことを望んでいました。ただし、この賞はインドネシアの学生にのみ与えられます。受賞者は Fenty 教授によって発表され、最高の発表者は西ペンタディオチームで、ロンボンゴチームは 2 位になりました。それでも、フタダアとイロチデアのチームは、上位に入賞しなかっただけなので、自信を失うことにはなりませんでした。日本の学生には、LPPM からの贈り物が贈られました。その後、県庁の公邸で夕食をとり、活動を続けました。

夕食後に、日本の学生はインドネシア人学生にボールペンの記念品を渡して、インドネシアの学生がボールペンを使うときはいつも彼らを思い出してほしいと言いました。オリビアさんはAKB48と呼ばれる日本のアイドルグループの歌「恋するフォーチュンクッキー」を演奏しました。全員の学生が歌のリズムに合わせて踊りながら、私達全員はとても興奮していました。次に演奏される曲はキロロの「未来」でした。歌は未来に到達することについて語っています。歌が演奏されると、すぐに別れとなる自分達のことを思い、ほとんどの学生が、すぐに泣いて、悲しみに落ちました。私達は歌を歌いながらお互い抱き合いました。榊原教授は、私達が泣いている理由を尋ねました。すぐに別れるのが悲しいと答えると、ただ笑われました。私達も涙を流しながらも笑いました。

その後、ゲストハウスに戻りました。ゲストハウスに到着して、私達はまだ話をしたり、お互いに冗談をしたりしていました。その後、日本の学生は休憩し、インドネシア人の学生も自宅に帰りました。

翌日、日本人の学生はオレレビーチへツアーに行きました。

図 6.34　ステークホルダーとゴロンタロ州政府に結果を発表しているフタダアグループ

図 6.36　発表終了後の日本とインドネシアの学生

共同最後の日

プログラムの最終日に、日本の友達を空港に送るため、ゲストハウスに行きました。私達は、日本の学生がゲストハウスで荷物をまとめて、バスに乗るのを待っていました。その時、私達は悲しみながら、お互いに挨拶しました。みんなで自撮りしたり、講師とゲストハウスの管理者と集合写真を撮影したりしました。

空港へ移動中、他のバスに乗っている日本の学生にテレビ電話で話しました。なぜなら、私達はまだ日本の学生たちと別れたくなかったからでした。

私達は日本の学生とのテレビ電話を中止したくなかったので、携帯をずっと握っていました。空港に到着後、日本の学生が乗る飛行機が空港に到着するのを皆で待っていました。その間、私達はお互いの物事について話し合い、お互いを知る事ができて良かったという事を話しました。また、みんなと連絡取れるようにメールアドレスを交換しました。多くの思い出を一緒に作った日本の学生に別れの挨拶をしました。

図 6.37　KKN Collaborative2018 年の参加者全員の集合写真

図 6.38　日本の学生が帰国する直前の写真撮影

第 7 部

イロティデア村において漁師とのストーリー

図 7.1　インドネシア、UNG と愛媛大学の学生達の初対面

その日の午後に、日本からの 11 名の学生と初めて会いました。お互いに挨拶し、自己紹介をしました。 その後、グループごとに座って、榊原先生からこれから始まる 2 週間の活動について指示を受けました。イロティデア村に割り当てられたグループは、福永晃さんと輪違典子さん、フィルハン・エルヴリザ・バディラさん、マルチェナ・スートさん、ミルナワティ・アハヤさんの 5 名の学生で構成されていました。

榊原先生の指示の後、KKN Collaborative プログラムの開催地としてのイロティデア村の状況とそこで行う活動について話し合いました。数日前に、UNG の学生はイロティデア村で直接観察していたので、いくつか問題が見つかった事を日本の学生に説明しました。

翌日が日曜日である事を思い出して、デュロフパ・トラディショナル・ハウスに行くことにしました。その後、福永晃さんは伝統的な市場でのゴロンタロの人々の様子が見たかったので、私達はリルヲ市場へ行くことにしました。それから、一緒に夕食をとる約束もしました。すべての議論が終わった後、彼らは非常に長い旅で、とても疲れていたので、休息の許可を求めました。

オタナハ城とリルヲ市場への旅行

昨日みんなで決定した予定の通り、私達のグループは午後 3 時にゲストハウスを出発しました。他のグループと一緒にオタナハ要塞に直行しました。交通手段としてグラブを使用することにしました。本当は最初、デュロフパ・トラディショナル・ハウ

スに訪問する予定でしたが、そこに立ち寄った時、ゲートが閉じられていたためオタナハ要塞に向かいました。

移動中の車の中で、ゴロンタロの文化について話をし、バハサ・インドネシア語とゴロンタロ語での会話を日本の学生に教えました。福永晃さんと輪違典子さんが英語とゴロンタロの言語を混ぜて、話したときはとても面白かったです。（例えば *We are monga.*）その午後の旅行中、インドネシアの歌も歌いました。

車に乗っている間の楽しい時間はとても早く過ぎ、あっという間に私達はオタナハ城に到着しました。そして、シタデルオタナハの歴史を語りながら階段を登り始めました。多くの観光客が寄って来て、私達とグループ写真撮影を撮りました。日本の学生は全員、オタナハ城の上から見られるゴロンタロの自然の美しさに興奮していました。彼らはその景色を写真やビデオに収めました。また、日本ではココナッツは珍しいため、たくさん生えているココナッツの木を見て、驚いていました。

次に、全体のグループはリルヲ市場に向かいました。日本の学生は、しきりにゴロンタロの伝統的な市場を訪問したがっていました。なぜなら、これまで見たことのないフルーツ、たとえばランサやゴロホバナナがあると聞いていたからです。日本の学生は、その市場で販売されているフルーツ、野菜、魚の名前と組成について、多くの質問をしました。日本とインドネシアの市場の外観が異なるため、彼らはとても興味がわき、楽しんでいるようでした。そして、バナナ、ランサとドラゴンフルーツを購入しました。日本でも、バナナとドラゴンフルーツはありますが、価格は非常に高くて、インドネシアで買う価格の 2 倍にもなるそうです。日本の学生はランサを食べたことがなかったため、それを味わったとき興奮していました。

あっという間に時間が経ち、午後 7 時になっていたので、私達のお腹はすいていました。 他のグループと一緒にベントールを使用して、Wong Solo（ウォン・ソロ）というレストランへ行きました。夕食の場所としてウォン・ソロを選んだのは、そのレストランは群島料理のさまざまなバリエーションを提供しているためでした。私たちは日本の学生が注文していない他の食べ物も味わうことができるように、お互いの食べ物をシェアしました。一緒に夕食をとることで、より仲良くなりました。夕食が終了し、支払いの後、私達はそれぞれの住居に戻りました。

KKN プログラム活動の１日目：イロティデア村にて

地域社会共同サービス活動の初日は、2018 年 8 月 27 日月曜日に開催されました。KKN には直接行かず、午前 8 時に、すべての参加者が国立ゴロンタロ州大学コミュニティ・社会研究所（LPPM）に集まり、UNG の第 1 副学長によって開かれた開会式に参加しました。それから、学長のビルで集合写真を撮りました。

図 7.2　チランゴ地区事務所への訪問

9 時に、私達はイロティデア村に向かいました。今日は、チランゴ地区のイロティデア村で行われる地域社会共同サービス活動の 1 日目でした。私たちの最初のアジェンダは、チランゴ地区本部を訪問することでした。そこでは、女性である地区長が歓迎してくださいました。私たちは訪問の目的を地区長に説明しました。 地域社会共同サービス活動を約 2 週間実施し、これから 2 週間行う活動の許可を求めました。

チランゴ地区から許可を得た後、イロティデア村の事務所に行きました。そこでも、村長と村の役人が歓迎してくださいました。イロティディア村のコミュニティの状況と社会で発生する問題について議論しました。この議論から、この村でのコミュニティの職業の大半は漁師であり、彼らが直面する主な問題は洪水災害であることが分かりました。

村長と事務所の役人との議論の後、私達は最初の観察を行い、コミュニティにインタビューすることにしました。最初に訪問する場所は、マスタード菜園でした。 偶然にも、彼の庭を収穫している農家がいました。

図 7.3　マスタード菜園への訪問

菜園の農家で行ったインタビューより、多くの情報を取得しました。彼らによると、収穫期には、農地ごとに 250〜30 万ルピアの価格で適用される販売システムが存在すること、顧客はそれを運ぶために菜園に直接やって来ること、そして、労働者には 1 日あたり 5 万のルピアが支払われ、家主や菜園の所有者とは異なり、彼らは通常最大 200 万ルピアの利益を得ることができる、ことが分かりました。

図 7.4　チロテ村の水地

その後、イロティデア村の隣にあるチロテ村の 1 箇所の淡水池を訪問しました。私達の目的は、魚と湖の管理状態を見るためでした。ここには、ナマズ、ティラピア、エビなど、さまざまな種類の魚がいました。池の右下の土地に、マスタードグリーン、セロリ、トマト、キャベツやその他の野菜が植えられていました。当時、所有者がいなかったので、道路を渡って土地を所有している農民だけにインタビューを行いました。農民のインタビューによると、「この地域では頻繁に洪水が発生するが、水は池には入らない。しかし、庭の植物は洪水で水没してしまう」とのことでした。

午後から、私達は村の事務所から第 2 村落まで歩いて行きました。住民の家を訪問する前に、乳棒と乳鉢を作る小規模内職をしている小屋に立ち寄り、乳棒と乳鉢の作り方を見学しました。この家内工業は、1990 年代に設立されたゴロンタロで唯一のものです。この小さな産業は、これまでなんとか生き残ってきました。このビジネスは世代を超えて受け継がれています。

図 7.5　乳棒と乳鉢を作る小規模内職

乳棒と乳鉢を形成するために使用される主な材料は砂とセメントであり、また、黒い物質を含むスーパーグルーを使用してすることにより、黒くて固いものになるようにしています。

生産された製品の量はほぼ千個ほどであり、それはテルナテの都市を含む外部地域に販売されています。製品 1 個あたりの価格はわずか 2 万ルピアです。

次に、私達は乳棒産業の建物のすぐ後ろを歩きました。そこには、居住者の住居がありました。住居はそれほど広くありません。地元の住民へのインタビューによると、これらの家の単位あたりの価格は他の地域の家に比べてはるかに安いことが分かりました。居住者は、1100 万ルピアの頭金と、購入費から頭金を除いた残金を分割して 15 年以内に払うことにしており、その総支払回数は 83 万回になります。居住者がすべての住宅ローンを支払ったら、家の証明書が与えられます。住宅の平均的な居住者は、公務員、警官、教師、銀行員などのオフィスで働く人々でした。 住宅団地の所有者はイロティデア村の居住者です。

その後、漁師 1 名にもインタビューしました。彼はタガフを作っていました。タガフは、漁師が魚を捕まえるために投げたり、仕入れたりする網です。この漁師は、彼の乗組員の援助によって自分のタガフを作っていました。

図 7.6　イロティデア村で見られたタガフ（網）の作成プロセス

第 2 村落で活動を終えた後、第 3 村落に向かいました。第 3 村落の村長に、第 3 村落で頻繁に起こる洪水についてインタビューしました。村長は 3 日連続で雨が降ると、村が洪水災害になると説明しました。

偶然な事に、第 3 村落の村長であるハスナ夫人は専業主婦で、私達がイロティデア村を訪問して歩く度に、同行してくれました。今回はハスナ夫人の村への訪問になりました。彼女によると、洪水が第 3 村落を襲うとき、住民は学校、村の事務所、図書館に避難する事が分かりました。

また、洪水を克服するために用いるウォータヒヤシンスの一般的な使用方法についても彼女に質問しました。ハスナ夫人は、村のコミュニティはその方法を取り入れたこともありましたが、人々の欲求と認識が不足し、社会性と技術的・身体的な訓練を

継続的に行うことができなかったため、それを使うプログラムは中止されたと説明しました。

フィールド観察の時間が終了したので、LPPM UNG に戻りました。私達は、LPPM UNG で、今日の活動より得た情報と明日のアジャンタについての計画について議論することから始めました。一日中行った活動の結果から、イロティデア村の人々の生活は非常に多様であると結論付けることができました。

KKN プログラムの２日目：リンボト湖への訪問

今日、私達はイロティデアの村に急いで行きました。そして、まず、日本の学生が滞在しているアズキヤゲストハウスに行きました。この 2 日目に、イロティデアの各村落の境界に関するデータの取得を開始しました。 イロティデア村は 3 つの村落で構成されており、イロティデア村の人々は、漁師と農民として働いていました。私達は、コミュニティの仕事と彼らが直面する問題についての質問リストをインタビュー形式にしてコミュニティに提供しました。インタビューを通して、リンボト湖の真ん中の道路の存在が彼らの仕事を妨げていると不満を言う住民がたくさんいました。

また、Al-Hidayah (アルヒダヤ)孤児院施設も訪問しました。孤児のほとんどは養父母に付き添われており、自分の年齢相応の学年ではなく、その学年よりも少し低いクラスに通っていました。彼らは自分の年齢相応の教育を受けることは難しいと言いました。21 歳の孤児のうちの一人は高校生 2 年生のクラスに通うよう強制されていました。これは、以前のテストの失敗による決定ではなく、彼らが学校で勉強したことがないという原因で、学校の教育を開始するのが遅れているからでした。

その後、私達はリンボト湖にも訪問して、漁師の仕事の妨げる原因になっているリンボト湖の真ん中の道路を直接視察しました。この視察が、解決策を見つけるのに必要な基礎情報になりました。私達はそこが観光スポットになる可能性を見つけましたが、残念な事に、リンボト湖地域はよく管理されていませんでした。

図 7.7　管理されていないリンボト湖地域の状態

午後 3 時になったので、私達の今日の活動は終了しました。LPPM UNG に戻って、フィールドで得た結果について評価と議論を行いました。

KKN プログラムの 3 日目：村落第 1 でインタビュー

朝の 8 時前に、私達のグループは全員集合して、イロティデアの村に出発する準備を整えました。この地域社会共同サービス活動では、特に時間管理の重要性について多くのことを学びました。

私達はイロティデア村に向かいました。移動中、ディスカッションを行って、グループメンバーの退屈感と堅苦しい空気を追い払いました。今日、私達は 2 つの小グループに分かれました。グループ 1 は住民にインタビューを行い、住民がリンボトの湖地域にどのように家を建てているかを調べ、グループ 2 はタマネギ農家にインタビューを行いました。

村の役人による昨日のインタビューに従って、本日、第 1 村落にあるタマネギ農家を訪問しました。所有者の名前はハリオノ・アリ氏で、タマネギ畑の 6,000m^2 の面積の管理に成功した 50 歳の男性でした。ハリオノ・アリ氏からタマネギの収穫時期、制約、収入など、さまざまな情報を得ました。彼の説明によると、収穫時期は 2 か月ごとに発生し、その都度自分の土地を耕して、タマネギを 1 か月以上植え直します。したがって、1 年間のうちに最大 3 回収穫できることが分かりました。

ハリオノ・アリ氏がよく直面する問題は天候によるものでした。タマネギは恒温状態にも過剰な水分にも耐えられないからです。ハリオノ・アリ氏は次のように仕事の状態を説明しましました。「私はこの土地をすべて自分で管理しているわけではありません。私を助けてくれる人が 5 人います。一人当たりの給料は 1 日 7 万 5,000 ルピアです。5 人の内、数人は一時的に働き、他の数人はずっと働きます。収入は天候と市場価格によって変化があります。また、収入を土地のサイズに基づいて計算すると金額は異なり、適切なマーケティングを行うと、収入の最大値は 5,000 万ルピアですが、最小値は 3,000 万ルピアです。そのほかに、農園と土地の管理は約 100 万ルピアかかります。 」

図 7.8　タマネギ栽培場への訪問

タマネギを植えるための初期の資本は約 2,500 万ルピアです。ハリオノ・アリ氏は 2 年前にタマネギ農家になりました。バイヤーはタマネギを買うために農園に直接来ます。土地の耕しには、レンタルのトラクターを使用し、通常はトラクターを操作する人を含めて 40 万ルピアが必要です。以前に、このタマネギ畑はトウモロコシの栽培に使用されていました。しかし、土地がそれほど広くないことと、収穫に 4〜5 か月かかるため、彼はトウモロコシをもう植えないことにしました。

さらに、ハリオノ・アリ氏の家の前にはガレージがあり、別のビジネスを行っていることが分かりました。ワークショップの収益は季節的であるため不安定です。ワークショップの顧客がたくさんいるなら、高収入を得ることができますが、顧客がいないと収入も低くなります。ワークショップの初期の資本は、ワークショップ機器のために約 1 億ルピアが必要です。

イロティデアの村には特有の成り立ちがありました。第 2 村落の住民数人とのインタビューの結果によると、過去には、イロティデア村の住宅地と一部の地域は、リンボト湖の一部でした。しかし、水がさらに引いたため、湖は干上がってしまい、やがて住民は家を建てて集落になり、村になりました。

私達の次のアジェンダは、チランゴ第 1 高等学校を訪問することでした。今回の訪問の目的は、学生にインタビューして、教育に関連する追加データを取得することでした。

学生達とのインタビューの結果によると、全体的に、高校を卒業する学生は大学での勉強を続けたいと考えていました。学生達は、教師、看護師、講師や警官になるという非常に高い夢を持っていましたが、進学するためには経済的な懸念があるため、悲観的になっているように見えました。

図 7.9　チランゴ第 1 高校の学生達とのインタビュー

ウィスマアズキアに戻る前に、今日行うアジェンダは２つありました。 午後の食事の時間に、第 2 村落のコミュニティの仕事、家族のメンバーや収入についてインタビューする時に使用する質問の形式について議論しました。私達が出会った村の数人の住民にインタビューした時、住民の一部は漁師からベントル・ドライバーに転職し

たことが分かりました。この転職の背後にある主な原因は、リンボト湖の真ん中の道路の存在によって引き起こされる収入の減少でした。

イロティデア村の住居の起源に関するデータをさらに強化するために、28 年間この村に勤めていた元村長官にインタビューしました。彼の名前はアブドラ・ツナ氏で、69 歳です。アブドラ・ツナ氏によると、最初はこの集落は村ではなく、3 軒の家だけあったことが分かりました。3 軒の家は、子供がいる家族で、やがてその子供達が結婚すると、彼らは自分達の家の左、右、前や後ろに新しい家を建てました。そして、いつしか干上がった湖の上に家が建ち並び、最終的には村になりました。

最初は、村の住民の一般的な職業は漁師でした。しかし、現在、漁獲できる魚の数が減少しているため、多数の人々は職業を変えています。これは、特に湖の中央に道路が存在したので、湖が小さくなっているためでした。

図 7.10　元村長官のアブドラ・ツナ氏とのインタビュー

アズキアゲストハウス に戻る

今回は LPPM UNG に寄って議論を行わず、ウィスマアズキヤに直接行きました。前日のように、フィールドで行ったインタビューの結果とデータについて議論しました。その後、私達は明日第３村落のコミュニティに尋ねるインタビューの質問を作成しました。第３村落の多数の住民は漁民でした。

KKN プログラムの４日目：村落第 3 でインタビュー

今日が KKN Collaborative プログラムの４日目になっている事に、私たちは気づきませんでした。私達はウィスマアズキヤを朝８時に出発しました。今日は第３村落で多数の家を訪問する事になっていたので、いつもより疲れる日になるだろうと感じていました。

活動する時間を有効に使うため、2 つのチームに分かれました。私達が今回準備した質問の内容は、村民の仕事を妨げる問題を評価する目的で作成した前回の内容とは異なりました。この新しいアンケートには次の内容を加えました。

1. リンボト湖の真ん中の道路について政府と連絡を取りましたか？ 連絡を取った後、政府は直接フォローアップしてくれましたか？

2. 2016 年以前の仕事は何でしたか？

湖の真ん中の道路はまだ建設されていませんでしたか？

3. 政府と話し合う機会があれば、住民は参加しますか？

第 3 村落には私達がインタビューする 12 人の家族がいました。みんな漁師として働いていました。インタビューの結果によると、湖の真ん中の道の存在が確実に住民の仕事の妨げになっていることが分かりました。湖に到達するためには 2 隻のボートを使用する必要があるのですが、1 隻のボートは湖の端から堤防の端まで使用され、もう 1 隻は堤防を横断して湖の本部まで使用されていました。悲しいことに、彼らのボートは 1 艇しかなく、1 艇の価格は約 200 万ルピアもしました。 収入の観点から考えた場合、ボートのお金を集めるには長いプロセスが必要です。しかしながら、日常生活を維持するためにお金が必要なので、追加のボートを購入することは難しいようでした。また、それとは別に、湖の水量の減少と強風（これは毎日ではありませんが）も同様に深刻な妨げになっていました。

図 7.11　イロティディア村住民へのインタビュー

以前、漁師は、この湖の真ん中の道路の問題について政府に訴えました。実際、チランゴ地区、地区長は問題を直接確認し、洪水が起きてもボートが通過できるように橋を建設することを約束しました。しかし残念ながら、今までその約束は実装されていません。

彼らは長い間この職業を営んできました。 しかし、湖の真ん中の道路建設が原因となり、今まで行ってきた職業を継続していくことが不可能になりました。そのため、2016 年以降、数人の漁師が職業を替えました。それでも、一部の漁師は、転職する仕事がないために、なんとか漁師を続けて生き残っています。たとえ彼らが職業を農夫に変えたとしても、湖岸の地域では洪水が起こるたびに水に浸かってしまうため、その選択肢は不可能です。

現在、漁師としての収入は 50%に劇的に減少しています。 2016 年以前は、彼らの平均収入は約 10 万〜11 万ルピアでした。しかし今、彼らの収入は以前の収入の半分になっていました。

チランゴ第 1 中学校への訪問

次の活動は午後にチランゴ第 1 中学校を訪問することでした。チランゴ第 1 中学校の校長は私たちを歓迎してくださいました。学校訪問の意図と目的を伝えた後、学校が準備してくださったクラスに案内されました。そのクラスの生徒たちは熱意があふれていました。特にインタビューでの彼らの真剣さから、より高いレベルへの教育を追求する彼らの動機が顕著であることが分かりました。イロティデア村の教育施設は、幼稚園から高校まで完成しており、住民の住んでいる場所から遠くない場所にありました。

漁師との 2 回目のインタビュー

昼食後、私達多様の漁場で別のインタビューを行いました。私達が集めた問題は、以前のコミュニティとまったく同じでした。しかし、私たちがインタビューした母親から素晴らしい話を聞くことができました。 彼女は売り子として働き、漁師である彼女の夫が獲った魚を歩き回って売っていました。

過去に、彼女は自転車を使って近隣の村に魚を売っていました。 しかし今では、彼女が魚を売るのを容易にする支援の形として、州政府から認可されたバイクを使用しています。バイクはゴロンタロ知事から直接与えられました。バイクのおかげで、現在、彼女は魚を売るだけではなく、午後にはケーキも販売しています。

アズキヤゲストハウスに戻る

今日はとても疲れました。私達は、日光の下でインタビューを実施し、データを収集するために家から家へと歩きまわりました。 しかし、私達は熱意を絶やしませんでした。私たちを奮起させているのは、得られたデータの量でした。 夕方になり、議論を行うためにアズキヤゲストハウスに戻りました。

KKN プログラムの５日目：政府にインタビューを行った

今日の私達の主な活動は、リンボト湖の真ん中にある道路の建設目標についてチランゴ地区政府にインタビューする事した。私達は、それについて、チランゴ地区本部の事務官と議論をしました。彼が「それは道路ではなく、洪水の発生を最小限に抑えることを目的とする堤防である」と説明しました。この堤防の開発はまだ完了していません。開発を許可されているゴロンタロ州の BAPPEDA（地域開発計画庁）は、この開発は段階的に行われていると説明しています。事務官はまた、私達が理解しやすいように、イラストを描いて説明しました。この堤防が建設された後、23 以下の支流に由来する貯水池となる人工川ができて、その状態が水を湖に直接行かせないようにしていました。現在、この湖周辺の小川から溢れた水は、洪水の原因となっていました。

また、オープンエリアが大きな木を植えるためにオープンエリアが作成されて、これも洪水を最小限に抑えていました。この場所は、コミュニティがプランテーション用の土地を管理できないよう意図的に作られていました。

十分に話を聞くことができたので私達はイロティディアの村の事務所に戻りました。 火曜日に政府および一般の人々とグループディスカッションフォーラムを開催するため、データに関する議論を続けました。 フォーラムで説明するアイデンティティ、仕事、収入やコミュニティが直面している問題を示す発表資料を準備し始めました。発表資料の準備に加えて、他のメンバーと協力してコミュニティの招待も準備しました。

午後 3 時になったので、火曜日に発表するデータについて話しながら、アズキヤゲストハウスに戻りました。ゲストハウスに着いてからも、会議の手配について議論しました。

UNG の dies natalies イベントに参加、ペンタディオリゾートへの訪問

図 7.2　日本の伝統的な衣装「浴衣」を着て第 55 回 UNG の dies natalies へ参加

今日は国立ゴロンタロ州大学の 55 周年でした。私達は朝の早い時間からセレモニーとパレードに参加したので、UNG の誕生日イベントを盛り上げる準備をすることができました。日本の学生は浴衣を着用して、日本の歌である東京音頭 2020 とフォーチュンクッキーに合わせてダンス・パフォーマンスを披露しました。たくさんの学生と講師が彼らを写真撮影に誘いましたパレードのルートはかなり遠かったのでその移動の間、人々は日本の学生と一緒に写真を撮りたいとお願いをしていました。

パレードの後、大学から伝統的な食べ物をプレゼントしてくれました。ゴロンタロと日本の学生はそれらを美味しくいいただき、非常に満足していました。午後から私達のグループがペンタディオリゾートを訪問する予定だったので、私たちはそれぞれの場所に戻って短い休憩を取りました。

ペンタディオリゾートは、温泉で有名なところです。それで、私達は西ペンタディオグループと榊原教授と一緒にこの場所を訪問しました。。この場所を探索しながら歩いていると、たくさんのゴミが散らばっていました。

学生と榊原教授は温水プールに入ろうとしましたが、温泉の暑さは沸騰しているかのように熱く、全員足を長く浸しておくほど熱さに強くなかったことが分かりました。また、サウナも試しましたが、こちらは温泉と比べて熱さに少し耐えることができました。

図 7.13　ペンタディオリゾートにて休憩するグループメンバー

KKN プログラムの６日目：
グループディスカッションフォーラムの準備

今日は、いつもより少し遅れてイロティデアの村に向かいました。午前 9 時半に村に出発して、移動中ディスカッションをしていました。フォーラムへの招待など、グループ・ディスカッション・フォーラム活動に必要なものもすべて準備しました。私たちは、第３村落の村長ハスナ夫人の支援を受けて、コミュニティへの招待状を届け

ました。 彼女は村の役人であり、私達がフィールドに行くときにいつも同行してくれました。

すべての招待状を配り終えた後、コミュニティとのインタビューより得られたデータをグラフ形式にまとめ、発表資料を完成させました。私たちが議論した主な問題は、経済、環境、社会に影響を与えるリンボト湖の真ん中の道路の存在です。その影響の概要は次のとおりです。

1. 経済学の観点から検討する場合、事前に説明した通り、道路は湖の漁師の収入を最大 50%減少させて収入に影響し、一部の人々を漁師からベントル・ドライバーに転職させました。

2. 環境問題に関して検討する場合、この地域では、3 日間連続して激しい雨が降ると、しばしば洪水が発生していました。洪水が収まると、湖岸には大量のゴミが残っていました。このゴミは、以前はコミュニティによって無責任に廃棄されていたものと考えられます。この状態は、いくつかの病気を引き起こす可能性もあります。

3. 社会問題に関して、私たちの願望について議論したいと思いました。しかし、インタビューを行ったとき、多くの人がこの湖の真ん中に建設される道路問題を議論することを恐れていることが分かりました。

私たちの解析に基づいて、これは主に政府とコミュニティの関係のギャップに起因すると結論を付けることができました。コミュニティが自分たちの願望を表明することを恐れているのはそのギャップのためです。私達はこの問題を解決するために政府、コミュニティと学生の間で会議を開くことにしました。会議での私たちの役割は仲介役です。

さらに、貧困についても話します。 多くの子供達は、経済不況のために教育を受けることができません。州政府は無料の教育制度を適用していますが、その制度には学校の制服と子供のスナックの費用は含まれていません。したがって、この費用は親が負担しなければなりません。

両親の職業が漁師で、1 日あたりの収入が 50〜60 千ルピアである人は、収入が十分ではありません。時々、彼らは収入がゼロの日もあるかもしれません。 堤防が建設されると、彼らが得る収入はこれよりも少なくなります。漁師達は、彼らの収入で家族全員が食べていけるように頑張っていると言いました。一軒に家族 5-7 人で住んでいる家族を想像してください。収入が十分であるとは言えません。 これはこの村の悲惨な状態です。

プログラムの 3 日目にフィールドに行った時、リンボト湖の地域で家の建設について確認した際、旧湖の土地に建物を設立する際の規制を検討しました。 政府の規制によると、土地管理に関する 2004 年の第 16 条では、第 12 条で次のように述べています。

「沿岸地域、海岸、干潟、沼地、湖、および以前の河川における土地の発生または埋め立ての結果から、州によって直接管理されています。」

以前は、リンボト湖の幅は約 900 ヘクタールに達し、深さは 14 メートルに達していました。しかし、現在、リンボト湖は、乾季になると川岸が広くなることにより、かなり土が堆積しました。これにより、リンボト湖の川岸をゴロンタロの人々が農業地域として生活し使用するための代替場所にしたのでした。

その後、イロティデア村の土地所有権の証明に関する情報を村の政府から得ました。一部の居住者は、土地の所有者であるという証明書を所有していません。それについて、コミュニティに直接質問するのは不適切だと感じました。なぜなら、このことを議論するには慎重を要するからです。ただし、合法性を得るためには、これはリンボト湖の土地の状態を管理するために必要でした。

KKN プログラムの 7 日目：
グループディスカッションフォーラムの実施

グループ・ディスカッション・フォーラムは今日実施されます。村に向かうとき、私たちは時間をかけて飲食の準備をしました。村の事務所に到着後、テーブルを丸く並べて配置する形で会議の席を準備しました。その後、コミュニティに戻り、午後 2 時に開催される会議に出席しました。会議が開催されたことの物理的証拠として出席者リストの作成を忘れず、行いました。

およそ 3 時間かけて、発表するパワーポイントを準備しました。時計はすでに午後 2 時になり、榊原教授と数名の政府関係者はすでに会場に到着していましたが、まだコミュニティが到着していなかったので午後 3 時まで待ちました。やっと、コミュニティが到着し始めました。そして、ちょうど午後 4 時半に、会議を開始しました。すべての地区政府、村の政府、一般市民および関連するステークホルダーが出席していました。まず、イロティデア村で見つかった問題の発表から会議が始まりました。 次に、政府と社会の間の議論が進められました。私達は事前に、イロティディア村で発生している問題に関連する既存のプログラムを政府に説明してもらいました。政府は、リンボト湖の真ん中にある道路もしくは堤防の建設についてコミュニティに説明しました。その後、コミュニティに質問・回答・解決策を提供する機会を与えました。

議論の結果は次のとおりです。

1. 政府は、人々にゴミの取り組みに協力するよう提案しました。この場合、社会は各村落のゴミ収集を確実に行って、その後、週ごとにごみ収集車でごみを収集します。

2. コミュニティは、村の役場にプログラムを提供する人々であり、村と地区の政府はそのプログラムを実行します。そして、コミュニティがイロティデア村の改善に参加できるように決定されました。

3. 一時的な解決策として、湖の真ん中の道路もしくは堤防の問題を克服するために、コミュニティは、水が出ても漁船が渡れるように、橋またはカルバートを促進するよう政府に要請しました。

図 7.14　グループディスカッションフォーラムの実地

KKN プログラムの 8 日目：発表資料の作成

今日は、データを完成させるためにイロチデア村の事務所に向かいました。 私達は、ゴロンタロ県庁で発表されるパワーポイント発表の資料を整理し始めました。データを議論するとき、少し困難を経験しました。それは、会話が明確に伝わらなかったからです。この問題は、インドネシア人と日本人の英語のアクセントの違いが原因で発生しました。 UNG の学生は、ジェスチャーと画像でアイデアを説明し、日本人の学生も同じことを行いました。

最終的に、私たちが話し合う主な問題として道路もしくは堤防を引き続き取りあげることになりました。その理由は、この道路の存在がさまざまな既存の問題を発生させる中核的な問題だからです。 また、政府とコミュニティ間のコミュニケーションの欠如も別の問題として取り上げることにしました。

昼食の後、私達は道路を 2 回目訪問し、問題が解決できるように観察しました。フィールドで、問題と解決に関連する議論を行いました。

私達はリンボト湖から村に戻り、コミュニティの収入に関するデータを図形式にまとめ始めました。発表の資料は 50%しか完成していませんでした。

昨日のように、私たちは午後 3 時にアズキヤゲストハウスに戻りました。それから午後 7 時まで議論を続けました。最後に、Kingdom Coffee Toffee に行って、地域社会共同サービス活動の参加者全員と夕食をとりました。

KKN プログラムの９日目：発表資料の完成

今日は、全部のグループは村を訪問しませんでした。みんな、発表の資料の完成に焦点を当てていたからです。すべての参加者が資料を編集しているため、LPPM UNG の部屋は非常ピリピリしていました。榊原教授と李准教授は、発表の改善のための方向性、意見や提案を提供するために学生たちの中にいました。 すべてのグループが順番に榊原教授に相談していました。特に私達のグループの場合、表、グラフ、図を使って発表を行うには、多くのものを追加して修正する必要がありました。

午前ちょうど 11 時に、イロティデアの村の事務所に行きました。 地区と村の政府は、地方自治体とイロチデアグループの地域社会共同サービス活動の参加者との送別会に私達を招待してくださいました。村の事務所に到着すると、村の役人が食べ物や飲み物を準備してくださっていました。イロティデア村の地域社会共同サービス活動が終了したことは非常に悲しいでした食事を楽しんだ後、地方自治体や地域の代表者と話をしました。次に、写真撮影を行いました。村長は、私達がこの 2 週間の間イロティデア村で行った活動についてとても感謝していました。

図 7.15　学生がイロティディア村に記念品を贈呈する様子

集合写真を撮って、送別会は終了しました。私達をとても歓迎し、2 週間支援してくださった村の政府に感謝を伝え、別れを告げました。第 3 村落の村長ハスナ夫人との別れは私たちにとって、とても悲しいものでした。ハスナ夫人は私達が暑い太陽の下を歩いてフィールドに出かけるときにいつも同行してくださった親切な人でした。私達はグループ・ディスカッション・フォーラムで撮った写真を印刷してフレームに収めて、記念写真としてプレゼントしました。単純なことですが、彼らはその写真を見るたびに私達のことを思い出すことができます。「イロティデア村、チランゴ地区、この地域のすべての政府とコミュニティに感謝します。」あっという間に、思い出の詰まったイロティデア村を去る時間が来ました。

私達は午後 1 時に、LPPM UNG に戻り、発表の資料の編集を続けました。 榊原教授との協議を継続し、改善を図りました。発表の資料は 80%できました。午後 3 時になって、アズキヤゲストハウスで議論が続けられました。翌日、ボネ・ボランゴ県

庁とゴロンタロ県庁の事務所で発表するため、他のグループも引き続き議論を続けていました。

KKN プログラムの１０日目：発表会の実施

地域社会共同サービス活動の学生全員にとって、今日は非常にストレスが高まる日でした。最初に発表するグループはロンボンゴグループでした。朝９時に、アズキヤゲストハウスからボネ・ボランゴ県庁の事務所に出発しました。到着後、ボネ・ボランゴの地区アシスタント III が出迎えてくださいました。。愛媛大学の代表者である榊原教授と UNG の代表であるフェンティ・プルフラワ教授が到着し、発表の前にスピーチを行いました。ボネ・ボランゴの県庁で開催される地域社会共同サービス活動は、今年で 3 年目の活動になります。

「コラボレーションが問題なく、持続可能に行われることを期待しています。」

スピーチの後、いよいよ発表が始まりました。ロンボンゴグループは、発見されたすべての問題と、コミュニティおよび地方政府と共同で設計した解決策について説明しました。調査結果を述べた後、司会者は質問や提案を提供する機会を与えました。

全体のイベントが終了しました。 次に、約 1 時間かけて、ゴロンタロ県庁に行きました。 ゴロンタロリー県庁の公邸では、ゴロンタロリー県庁のアシスタント III が出迎えてくださいました。 今年は、ゴロンタロ県政府と UNG との協力で地域社会共同サービス活動は 2 年目を迎えました。

残りの 3 つのグループが発表を行いました。発表の順番は、一番目にフタダア村グループが発表し、2 番目に西ペンタディオグループ、そして最後にイロチデアグループが発表しました。いよいよ私達の発表の順番が来ました。ゴロンタロの政府と直接対面するので、少し緊張しました。発表の内容は次の通りです。

1.経済危機に起因する教育上の問題

2.コミュニティの人々が政府へ要望を伝える方法に関する認識の有無ついては、どのようにして政府へ自分達の問題を伝えればいいのかわからないと答えたコミュニティが 72%に達し、問題を訴えたが政府からフォローアップされていないと答えたコミュニティが約 21%に達しました。

それ以外に：

3.コミュニティの収入が最大 50%減少した。

4.降雨量が多いときに発生する洪水

5. 湖の水の堆積状態

私達はインドネシア語を使用して発表を行いました。日本の学生が発表するときは、インドネシア語に翻訳しました。環境庁の従業員から、政府へ要望を伝える方法に関する人々の認識の有無について質問がありました。彼は、データの収集方法について尋ねました。なぜなら、私達が小学校程度の教育を受けた、すなわち教育が不足している人だけにインタビューしたように見えたからです。これらの人々へのインタビューだけを行った場合、彼らは政府への要望を表明することを恐れているだろうと彼は付け加えました。その質問に、私達はインタビューの主題に焦点を合わせないランダムな方法を使用したことを説明して答えました。

さらに、イロティデア村のコミュニティの大部分を占める最も高い教育のレベルは小学校であり、それらのほとんどは第 2 と第 3 村落の住民でした。私達はコミュニティを選んでインタビューを行わなかったと説明しました。 第 2 と第 3 村落にいるすべての漁師が私達の研究の対象だったからです。

質疑応答のセッションが終わったので、発表が優れていたグループを表彰する時間となりました。 1 位はペンタディオ村のグループ、2 位はロンボンゴ村のグループ、3 位は私達のグループ、そして 4 位はフタダア村のグループでした。その後、夕食と集合写真を撮って活動を続けました。 夕食後、ゴロンタロ県の公邸でのイベントはすべて終了しました。夜のちょうど 8 時半に、ゲストハウスに戻りました。

図 7.16　各グループの発表完了後の様子

地域社会共同サービス活動の参加者である Viky（ヴァイキー）さんの家に行く前に、ゲストハウスに集まりました。明日日本の学生が母国に出発するので、、私達は一緒に夕食をとりました。そして、私達は記念品としてお土産を贈りました。 ブレスレット、ファン、キーチェーンを贈る人やゴロンタロの伝統的なスナックを贈る人もいました。

今夜は、すべての参加者と一緒にいられる最後の夜です。全員が悲しみにひたっているように見えました。グループの結成から始まり、プログラム全体の思い出につい

て話をし、お互いの身の上話もしました。その夜の間、他のグループメンバーたちも歌ったり遊んだり、楽しい時間を過ごしました。

時間が経ち、日本とインドネシアの学生の別れの日がついに来ました。私達の友人である日本の学生を空港に連れて行きました。

日本の学生との別れ

私達が自分の家族のように親しいみんなと離れる事は、それはとても悲しい事でした。私達が一緒に過ごしたこの 12 日間は非常に短い期間でありながら、多くの思い出があったことに改めて気づきました。

日本の学生全員、榊原教授と李准教授とともにチェックインエリアに向かいました。「また会いましょう」 「地域社会共同サービス活動中、色々ご協力いただきありがとうございました」。 「いつかまた会えることを願っています」。 「さようならではありません、また会いましょう」。

図 7.17　愛媛大学の学生達との写真撮影